第 6 章

第６章　文化（風俗）

はじめに

文化は政治を動かさない、然し人々は文化を欲している。とはある有名人の著書の冒頭にあった。私は郷土の先輩で、若くして事業には成功しながら、禾折した方の御宅をお訪ねすることがあった。戦後間もない頃であった。そこの事務所には手造りの額に入れた、希望に起き！愉快に働き！感謝に眠る！という自訓ともいうべき、ものが掲げてあった。

今、文化とはと自問自答したとしたら、簡単な文字であり、解りきったことと思い過してしまう事だろうし、安い辞書を開いてみても、世の中が開け進むこと、位にしか書いてない。そのような現況の中で、この故人の教訓は簡明に文化の真髄を表現し教えてくださっていることと思う。

当町の文化財保護審議委員会は５．６年前から昔からの生活民具、古文書の蒐集や、遺跡埋蔵地として指定されている地から発掘された、古代石器土器の保管整理等に微力を盡しているが、これ等の貴重な物品の一部は旧稲取幼稚園の教室に、やや大きな物は八幡神社境内のプレハブ倉庫に或は或個人の御好意でその方の畑の中へ建てさせて頂いた倉庫にと、一日も早く日の目を見ること、即ち先人の生活を目で見、我家の歴史を目で知り、我町の変遷を正確に把握してくれることを願って今は静かに眠っている。

このような仕事は表面誠に前向きではない地味な仕事だが、「子供としては自分のことは自分でやる子に！　自主敬愛の実行出来る中学生に！年老いた人達には安心して死んでゆけるような、老後福祉の完璧な町」そのような町将来の構想の片鱗だけでも判読出来る30周年記念誌にしたい。ただ単なる現況報告や過去の資料の整理整頓だけで終らすべきでない！そのような気概をもって編集に当った。

第１節　神社と寺院（仏閣）

１．神社

八幡神社　稲取字八幡小路

祭神　穂都佐和気命（ホツサワケノミコト）、誉田別命（ホンダワケノミコト）
例祭　７月14・５日（旧８月15日）
境内　約18870㎡
鳥居　石造２基
社殿　入母屋造（向拝及破風付）

〔由緒〕

穂都佐和気命は当地の総鎮守産土神で、この里を開いた神とされ、社伝に摩牟祢（マムネ）明神（ミョウジン）と称せられ、延喜式神名帳にも記載されている。中世源為家が別殿に八幡神社の祭神誉田別命を併せまつった。

鎌倉幕府の初め、源頼朝山地を奉じ、以後代官の崇敬厚く徳治年間代官加藤勝世、社殿造営の梁棟文あり。徳川幕府に至っても代官の崇敬厚く御供物、奉献、幣帛（ヘイハク）、御供進が続いた。今の拝殿は安政年間代官原川興七郎が氏子を推奨して造営したものである。

三島神社　稲取字洞の川

祭神　大山祇命（オオヤマズミノミコト）、事代主命（コトシロヌシノミコト）
例祭　7月13・4日
境内　6567㎡
鳥居　石造1基
社殿　流れ造（向拝は短かい）

〔由緒〕

創立年代不詳。正徳年間再建の記録あり、本社は昔、奥平（現、字山田）にあったが、万寿年間、現在地に移す。

その後、崇徳天皇の御霊顕ありし折、大雷にて神社境内の老杉へ天より石2個が降り、今も本殿合龍中に安置してある。

素盞嗚神社　稲取字下赤坂

祭神　素盞嗚命（スサノオノミコト）
例祭　7月15日・6日
境内　9830㎡
鳥居　石造2基
社殿　入母屋造（祇園形式）

〔由緒〕

元和3年（1617）創立（豆州志稿。）農耕神素盞嗚命を祭るのは稲取の農地開拓史との関連上重視される性質の神社であ

るが、郷人が「天王様」と呼んでいるのは京都の祇園信仰の波及と関連した小児の疫病除神「牛頭（ゴズ）天王」が蘇民将来と関係があり、素盞嗚命と習合祀されたものである。

山神社　稲取飯盛山

祭神　大山祇命（オオヤマズミノミコト）
例祭　7月17日
境内　14700㎡
鳥居　木造石造各1基、内木造の1基は53年震災後再建、他の1基は未修復
社殿　簡易な流れ造り

〔由緒〕

南豆風土記には享保の棟礼があると記されているが、現存しない。往時字大久保の八代藤内左衛門と云う人がその守護神として創建したと伝えられている。境内にはいまだに老木大樹が残り社殿前の石垣と石段は整然として、右神殿の優美さが想像できる好環境である。

赤松神社　稲取横ヶ坂

祭神　事代主命（コトシロヌシノミコト）

例祭　1月17日
境内　約290㎡
鳥居　石造1基
社殿　簡易な拝殿だけ残っている

〔由緒〕

創始不詳であるが、地形からみても祭神からみても海島を望む三島大社系の地主神で、相当古い時代の創始と思われる。神殿も朽ちて荒廃の観があるが、附近からは土師器などが出土しており、古代まで、遡のぼる可能性もある。

愛宕神社　稲取東小田代

祭神　火産霊神（ホムスビノカミ）

例祭　7月17日
境内　約440㎡
鳥居　石造2基
社殿　祇園形の入母屋造（元瓦葺）
〔由緒〕
寛政11年（1799）再建の記録があるが、現社殿はその古朽状態からみて、当時のものと思われる。（古瓦形式も江戸時代末期）口伝では素盞嗚神社の古社殿を移したといわれるが、正否はさておき町内では最古の社殿である。彫刻も古びているが立派なものである。

志理太乎宣神社（来宮神社）
東伊豆町白田宮後
祭神　志理太乎宣命（シリタオギノミコト）・五十猛命（イソタケルノミコト）
例祭　10月24・5日
境内　13596㎡
鳥居　石造1基
社殿　入母屋造（向拝付）

〔由緒〕
康永2年（1343）再建の記録が南豆風土誌にしるされている。康永は南北朝の北朝年号で町内の神社再建では最古のもの（現神殿は大正期の建立）境内の公孫樹の古木は樹令推定300年前後と見られるが社殿の山側の枯れた公孫樹は昭和初年に朽倒したが、更に古くおそらく千年以上のものであったろう。
社殿内に安置された2棟の本殿は江戸中期の作で簡素ながら均斉のとれた流れ造りで、一流の宮大工の作と推定される。それぞれ本殿の社章から、「木の宮」と「八幡宮」であることがわかる。

片菅神社　片瀬字山岸
祭神　片菅命（カタスゲノミコト）
例祭　10月8・9日
境内　13134㎡
鳥居　石造2基
社殿　向拝付入母屋造（略祇園造）
〔由緒〕
徳治2年（1306）創始と伝えられるが

詳でない。祭神から推して白田来宮神社と同年頃の創始と思われる。

片菅命は事代主命の属神で、志理太乎宣命とは同属同格である。

水神社（スイジン）　奈良本字間門
祭神　弥都波能売命（ミツハノメノミコト）
例祭　10月15日
境内　約12400㎡
鳥居　石造2基
社殿　略流れ造り

〔由緒〕
永正16年再建の記録があるが創始は詳でない。奈良の京より移住した者がこの地を開拓し地名を奈良本と称し、その際当社を建立したと言われている。奈良本の水田地帯の中央に位していたのでその水利守神として水田開拓時に祀られたものであろう。神社の境内は広く老樹の推定樹令からみて3・400年さかのぼることは可能である。

鹿島神社　奈良本字釜屋敷
祭神　武甕槌命（タケミカツチノミコト）
例祭　10月27日
境内　約6070㎡
鳥居　石造2基
社殿　祇園造

〔由緒〕
天文12年修営の記録があるが創立は詳でない。鹿島信仰の盛行する平安時代後期から鎌倉時代にかけての土地の豪族が鹿島本宮から招来したものであろう。祭神は武道と水運（海上安全も含めた）の神様であるから、海岸に住む人々の崇信を集めたためか、社殿は小格ながらも極めて手のこんだ造りである。

三島神社　東伊豆町大川字宮田
祭神　事代主命（コトシロヌシノミコト）
例祭　10月29日
境内　約7250㎡
鳥居　石造2基
社殿　入母屋造（正面及両側面に彫刻がある）
〔由緒〕

享徳３年（1454）の重修棟札のことが南豆風土誌に見えるが現存せず大永４年（1624）の棟札が残る。

三島信仰一連の出雲系で海島漁業の守神であるから、おそらく稲取、河津等近郷の三島神社と相前後しての創立であろう。神社の正前のナギの古木や背後のアオキ、ケヤキ、ホルトの木などの巨木があることや宮田遺跡（縄文中期及古墳時代土師出土）のほぼ中央にあることから、古い年代から村の中心になっていたと思われる。

２．寺院（仏閣）

見海山来迎院　正定寺（浄土宗）
東伊豆町稲取833～１
本尊　阿弥陀如来座像
創立　養和元年（1181）
開山　源誉存応観智国師
開基　村木善左衛門
現住職　加藤静宏（就任昭和35年６月）

〔由緒・伝誦等〕

。　芝増上寺中興観智国師伝来の金襴９条。７条袈裟当寺に伝わっていたというが今は不詳。

。　本尊阿弥陀如来座像は鎌倉時代の仏師によるものである。

。　当寺は江戸時代初期寛文10年の大津波で村落が壊滅的な打撃をうけた際流失し、わずかに本尊を残すだけになったと伝えられている。

瑞雲山　吉祥寺（禅宗・臨済宗　建長寺派）
東伊豆町稲取424
本尊　釈迦牟尼仏
創立　天文７年８月（1538）
開山　林際寺59世錬叔宗金禅師
開基　不詳
現住職　福岡千秋

〔由緒・伝誦等〕

河津林際寺59世、錬叔宗金禅師が此の地に来て草庵を結び居住３年四衆叛崇する者が多く、勧請して一寺を創立、本山に請して禅師を開山とし吉祥寺を号した。

以後、宗風殆に振ったが星霜移り、その間に旧記が散逸して詳でない。

稲取山　善応院（曹洞宗）
東伊豆町稲取400
本尊　十一面観音
創立　嘉吉年間（1441～43）
開山　真覚律師（真言宗）
大室存道大和尚（曹洞宗）
開基　稲昌寺殿大山興雲大禅定門
現住職　高村哲心（就任、昭和21年11月）

〔由緒・伝誦〕

本山は往昔、真言宗高野山の末派で稲昌寺と号し、創立は嘉吉元年鈴木三位大臣25代の嫡孫鈴木丹後守繁定の末孫（熊野党海賊）鈴木孫七郎繁時の開基と伝えられている。

後元和２年（1616）鈴木繁時の７代の孫、鈴木助七郎繁元という者が駿河国富士郡原田村永明寺７代の師大室和尚を請じ入れて曹洞宗に改宗し、今日にいたる。

月桂山　清光院（臨済宗建長寺派）
東伊豆町稲取247
本尊　薬師如来
創立　永正２年（1506）
開山　大琳俊禅師
開基　清光坊
現住職　長谷川令山

〔由緒・伝誦等〕

元徳２年高野山の修験者清光が薬師仏を負い当地に来て加持祈禱を行ったところ霊験すこぶるあらたかであった。為に村の有力な信徒由右衛門という者が一宇を建ててこの薬師仏を請けて祀った。

後にこの堂が焼けて本尊薬師を残すだけとなった。永正２年林際寺58世大琳禅

師を勧請して中興開山とし、堂寺を再建したがその後幾度も火災に罹り、特に大正13年8月8日には本尊を持ち出しただけですべて烏有(ウユウ)に帰した。現在17世桂堂和尚の回向文だけが残っている。

大慈山　済広寺（臨済宗建長寺派）
東伊豆町稲取563
本尊　如意輪六臂観世音菩薩
創立　天正年間（1573～1591）
開山　徳翁禅師
開基　山田大家の祖山田太郎左衛門
現住職　長谷川令山（就任昭和50年8月）

〔由緒・伝誦等〕

当山は元山田の地にあって渓松庵と号し真言宗であったが天正の頃水害によって当地に移築され済広寺と改称。臨済宗建長寺派となった。

山田大家の先祖は信州武田家の落武者であったが、伊豆の地に隠棲し、渓松庵を建て農耕しつつお持仏を信仰していた。境内のカヤの大樹は県指定天然記念物である。

如意山　成就寺（日蓮宗）
東伊豆町稲取257
本尊　釈迦牟尼仏
創立　寛永17年（1640）
開山　智見院　日羅上人
開基　富岡与五治衛門・斉藤重右衛門
現住職　今村本彰

〔由緒・伝誦〕

当山は340年前壇徒富岡、斉藤両氏先祖の発起により身延山貫主智見院日羅上人に開山を請い奉り本末契約成立、日羅尊師から直筆、板本尊と如意円満山大願成就寺と寺山号を賜わる。この勧請には

日羅上人の法弟如行院日禅上人並に弟子の顕是院の両氏が諸国霊場参詣の折、たまたま土地の富岡与五治衛門の数代の祖先が領主伊東頼高公から賜って家宝としていた男型の天照皇太神座像（天台の聖者恵心僧都の作と伝えられる）を安置する磯辺の小堂（慶長年間建立）に止宿し、富岡、斎藤の両人が日禅上人から説法を聴聞した折、一寺を建立の発願となって、師檀同行して身延登山となったと伝えらている。

日禅上人を2世住職とし、翌年弟子日覚上人3世を承け、以後法灯330有余年連綿として現在に及んでいる。

近松山　蓮行寺（浄土真宗大谷派）
東伊豆町稲取3021の5
本尊　阿弥陀如来
創立　慶長5年（1600）
開山　蓮行僧都
開基　不詳
現住職　藤辺正義（就任　昭和37年11月）

〔由緒・伝誦〕

浄土真宗の宗祖親鸞聖人の法孫蓮如上人の直弟、近江国志賀郡大津宿住、近衣御坊隠居蓮行法師が祖師の旧跡を順拝して歩かれた折、この地に寄られ、東町字畑に創立された。

創立は慶長5年（1600）で以後大正10年5月に字畑から現地に移転した（13世竹寿当時）

田代山　栄昌院（臨済宗建長寺派）
東伊豆町稲取2910
本尊　延命地蔵菩薩
創立　天文12年（1543）
開山　錬叔宗金禅師
開基　伊東賢道
現住職　大鳥元重（就任　昭和28年4月）

〔由緒・伝誦〕

錬叔宗金禅師は河津町沢田の林際寺の住職を辞めて以来各地の寺を歴住し、天文年間に吉祥寺に再び帰って住職をされた時、稲崎（稲取）の領主・伊東賢道は御領主様と言って河津荘を領していた。しかし、稲取に住んでいたので稲崎領主と称したと言われる。

かつて、父栄昌が住んでいた養老庵を南窪（現在地）に移して、禅師の隠居所としたと伝えられる。

来宮山　東泉院（曹洞宗）
東伊豆町白田76
本尊　聖観世音菩薩
創立　明応３年（1494）
開山　最勝院７代　笑山精真大和尚
開基　金指築後守（北条氏直の臣）
現住職　金田一来（就任　昭和13年12月）

〔由緒・伝誦〕
当山は元真言宗で北条氏直の外臣、金指築後守が故あって勢州からこの地に来遇し、当寺を開基してここで終焉した。その後曹洞宗に改宗した。
当山の本尊、聖観世音菩薩は築後守が武運長久家内安全を祈念してまつったもので、作者は「役の小角」（エンノオズメ）と伝えられている。
色衣着用の寺格をもつ古刹である。

泉涌山　普応寺（曹洞宗）
東伊豆町白田656
本尊　十一面観世音菩薩
創立　徳治年代（1306）
開山　最勝院11世仏山長寿和尚
開基　泉涌院殿天宗桃春居士
現住職　兼子正人（就任　昭和41年１月）

〔由緒・伝誦〕
本尊　十一面観世音像は、永承８年（1053）卯月に作られたと記してある。

大沢山　龍淵院（曹洞宗）
東伊豆町片瀬166
本尊　聖観世音菩薩
創立　弘安元年（戊寅）
開山　骨応長薫大和尚（曹洞宗）
開基　隆興（真言宗）
格翁證逸（臨済宗）
開檀那
龍渕院殿心峰宗安居士
龍渕院殿華林妙心大姉
現住職　高木俊栄（就任　昭和27年８月）

〔由緒・伝誦〕

創立時は真言宗であったが、後格翁證逸和尚改宗し、寛永19年まで臨済宗となる。
正保２年最勝院14代骨応長薫大和尚の時、曹洞宗に再改宗今日に至る。
山門は、江戸時代の名工“左甚五郎の作”との言い伝えがある。

金沢山　自性院（曹洞宗）
東伊豆町奈良本98
本尊　薬師如来
創立　僧祖元　永正元年（1504）
開山　仏山長寿　天正７年（1579）
開基　自性院殿持徳良道大禅定門
現住職　小林真司（就任　昭和16年12月）

〔由緒・伝誦〕
伊豆国弘法大師霊場88か所、第30番札所。
太田道灌の末孫太田持広が最勝院の11世仏山長寿大和尚を招いて曹洞宗の法地となす。

大川山　龍豊院（曹洞宗）
東伊豆町大川278
本尊　釈迦牟尼仏
創立　弘治元年（1555）
開山　笑山精真和尚
開基　不詳
現住職　浅井忠雄（就任　昭和20年９月）

〔由緒・伝誦〕
弘治元年（1555）創立当時は真言宗であったが、その後荒廃していたのを永禄の始め、田方郡中大見村（現中伊豆町）の古刹最勝院７代の師笑山精真和尚が此の地に止錫し、山号を大川山、寺号を龍豊院とし、曹洞宗を開法した。

第２節　文化財・遺跡

１．県および町指定文化財

		名称	所有者	所在地	種別	内容	指定年月日	備考
県指定	1	済広寺のカヤ	稲取済広寺	稲取285	天然記念物	根廻6.0　目通5.0　樹高18.0　枝張り17.0	昭40．3．19	
	2	シラヌタの池とその周辺の生物想	国（河津営林署） 奈良本国有林332い	天城山奈良本入1553の１	〃 （総合）	モリアオガエルのせい息地とその周辺の生物植物	46．8．3	0.52ha
町指定	1	中山１号湿原	東伊豆町	稲取字中山3324の１の内	〃	稲取泥流層と大峯山の接点に生じた湿原で、湿原植物（主としてラン科）を自生する。	54．7．27	
	2	中山２号湿原	〃	〃	〃		〃	
	3	芝原湿原	〃	稲取字芝原3325の１の内	〃		〃	
	4	桃野湿原	〃	稲取字桃野3331の内	〃	稲取泥流層の分水嶺地帯湿原一帯珍稀な湿原植物を自生する。	〃	
	5	横ヶ坂の松	山田元八	稲取2542	天然記念物（庭園樹）	模様直幹庭園樹　推定樹令150年　芸術的価値が高い。	〃	
	6	山田大家の松	山田泰彦	稲取2624	〃	模様直幹庭園樹　推定樹令250年　樹高６ｍ　枝張４ｍ	〃	
	7	鳳凰の松	田村智美	稲取1813－１	〃	模様直幹庭園樹　推定樹令200年　一の枝張８ｍ	〃	
	8	シダレザクラ	浅井義臣	大川278	〃	樹高８ｍ、枝張5.5ｍ　推定樹令400年以上　形状良く、単弁花で純粋種	〃	
	9	西堂・山駕籠	長谷川令山	稲取285	工芸	江戸中期の建長寺派高僧の使用したもの。工芸的価値が高い。	〃	
	10	穴ノ沢遺跡	太田喜一	奈良本1401	埋蔵文化財	縄文時代前期と推定される土器（硬度が高い）等、多量に埋蔵する。	〃	
	11	鹿島踊	土屋惇	奈良本1044	無形民俗芸能	鹿島神社祭礼の踊り４例のうち最南限中世以来の原型が残る。	〃	
	12	三番そう	稲取浜３区	稲取浜３区	〃	伝統的子ども三番そう。技術・衣装	〃	
	13	シラヌタ大杉	国（河津営林署）	奈良本国有林242林区内	天然記念物	根廻12ｍ　目通９ｍ　樹高45ｍ　推定樹令1,000年以上　枝張東西約25ｍ　南北約30ｍ	56．3．25	
	14	畳石	栗田卓男	稲取223－１	史跡	慶長年間　江戸城修築に用いた築城石の内２個が海岸に残されたもの。	55．7．25	
	15	ぼなき石	大川区（木村三郎）	大川	〃	上記同様の歴史記念物　里人から古来「ぼなき石」とよばれ名物扱いされている。	〃	羽柴左ェ門大夫（福島正則）
	16	築城石		大川　谷戸山	〃	大川谷戸山間に残された巨大な築城石の完成品	〃	
	17	引幕	教育委員会	稲取	工芸	江戸時代後半、江戸魚河岸問屋衆から稲取若衆へ寄贈された。村芝居用の舞台引幕。	56．3．25	
	18	稲取燈台	萩原光一	白田1731－３	史跡	明治43年稲取漁業組合と稲取村が建造した洋式燈台、石造、海抜130ｍ。	57．9．13	復元完成 Ｓ．60．3．25
	19	片瀬海岸保安林（海防松）	片瀬財産区	片瀬海岸	〃	樹令250年前後の海岸防風魚付林 松平定信の植えさせたものとして史蹟評価あり。	54．7．27	
	20	話し合いの記録 16㎜フィルム （稲取婦人会のあゆみ）	東伊豆町 教育委員会	稲取3354	歴史	この映画は全国各地で実施された「話し合い活動」に焦点をあわせ、この運動の代表的な稲取にカメラをすえ話し合いの活動の３年間にわたる姿をセミドキュメンタル形式に再現したものである。戦後の日本の婦人学級の出発点。	62．4．1	北欧映画社より寄贈される
	21	大川三島神社棟札	三島神社氏子	大川	歴史	１．享徳３年申戌霜月11日　２．明広９年庚申霜月初６日 ３．大永４年甲申年２月24日の３点の棟札	63．4．1	

(1) 北川鹿島神社の起源と鹿島踊りの由来

北川鹿島神宮がこの地に祭られた時代は判明しないが、天文10年北川釜屋敷鹿島神宮重修との記録が残って居るが、其の前のことは不明である。御宮の棟札が天正17年に上って居るものが在るので当時すでに御宮が建立されたものと思われる。祭神は乙橘姫命であるが、元社は茨城県の鹿島神宮であると言われて居る。古老の話に依ると、鹿島神宮はどの社でも御神体として特別の石があり、社殿の方向は本社の茨城の元社方向であると言われて居る。北川鹿島神社も拝殿真下の鳥居内に、異質の石があり昔は其のまわりに鉄柵を張って上に登れぬ様になって居た。社域が狭いので此の石を取りのぞき鹿島踊りを行う様にしようとして除去作業を始めたが、下が段々大きく広がり、とても除去出来ず、其のまゝに残って居る。元社の鹿島神宮にも謂れの石が祭られて居る。元社の鹿島神宮は今から1300年前神宮寺という名稱で開設されたが、神仏混合観念から１体性のものと信じて居た。当時此の地域の人達は歌や踊りがとても好きで、念仏や御詠歌と共に踊りも行われた様だが、其の中で女踊りが念仏踊りで男踊りが鹿島踊りとして伝わって来た。それと併せて鹿島神宮で一年の吉凶の占いが始まり此れを全国に広めるため事触れと云う神人の役目として、初めは鹿島信仰を広めるため御幣を背負って街々を歩き、鹿島踊りを踊って人々を集めて占いの結果を知らせ御神札を頒布したのだが、やがて、偽りの事触れが現れ始め大衆をまどわす様になったので、寛文10年今から300年前寺社奉行に取締ってもらい、鹿島神宮でも事触れを止め、御師と云う制度に切替えて、参宮の案内役にした。

此の事触れに当った神人たちが諸国巡回しながら伝えて行ったのが、鹿島踊りやみろく踊りで、はじめの頃鹿島の事触れであることを証明するために用いられたのであり、各地で弥勒信仰が広がって居る時弥勒世直しに鹿島の世直しを加えた踊りはきっと喝采をあびた事と思われる。銚子や波崎の漁港に入れば参宮して踊を教えてもらった人も多いと思う。

今此の鹿島踊りが鹿島で中絶されたのは、事触れ制度が無くなり此の踊りを伝える人が踊りを伝える必要が無くなったためであろう、それに御師となり参宮者の世話をするのが忙しくなり、本社の鹿島では絶えて仕舞ったと思われる。今踊りの残って居る地域は静岡県下では伊豆の東岸だけだが北川は其の最南端地である。北川の踊りは海路に依り伝わって来たと伝えられて居る。

(2) 宮後遺跡

① 調査の契機と調査団の編成

東伊豆町に於ける遺跡の発掘調査は、これまでに奈良本地区に所在する峠遺跡、穴ノ沢遺跡、白田地区に所在する宮後遺跡の３ヶ所がある。

宮後遺跡は、南東に延びる丘陵上に位置し、古くから縄文時代前期から後期にかけての遺跡として知られていた。

昭和58年、当町教育委員会が関与した宮後遺跡発掘調査（第１次・第２次）では、広大な遺跡のうちのわずかな面積の調査ではあったが、敷石住居跡、竪穴住居跡、土壙等の遺構が発見され、その重要性が明らかになった。

遺跡周辺では、発掘調査を契機に宅地化の機運が高まり、昭和61年８月には、個人住宅建設をするにあたっての対応についての打診があった。翌年１月に入ると、住宅建設が本格化し、開発申請があった。

同年３月、発掘調査の範囲を明確にすることと、調査の方法等々の件で、静岡県教育委員会文化課の指導を仰ぎ、土地所有者との協議を持つこととなった。

静岡県教育委員会文化課の黒田勝久指導主事の指導のもと、補助金の申請書の提出をはじめ必要事項等の準備を開始した。それと平行して、東伊豆町教育委員会においても調査体制について協議し、宮後遺跡の発掘担当者として竹石健二（日本大学教授）、澤田大多郎・野中和夫（日本大学講師）の三氏に依頼することとなった。

② 遺跡の位置と地理的環境

伊豆半島は、富士火山帯に属し、太古より幾度となく火山活動があり、関東ローム層が堆積した後にも東部地帯では、火山灰が降下したり、泥流が押し寄せた痕跡が残存している。本遺跡においても、それは顕著である。

宮後遺跡は、伊豆半島の東海岸のほぼ中央部、伊豆急行下田線の片瀬白田駅より西へ約250mの台地上にあり、行政区画では、静岡県賀茂郡東伊豆町白田字宮後112,113番地に所在する。

本遺跡がある台地は、海蝕作用によって東端部では急激に高度を減じる一方、西側では後背する急峻な地形が末端近く

で一端途切れ、そこから比較的緩やかな勾配で降下している。本遺跡は、その東端部、標高約50mの地点に位置している。

北東および南側には支谷が入り組んでおり、このうち、南側に位置する支谷の奥には湧水点があり、他方、遺跡の北東約400mには相模灘に注ぐ白田川の河口があり、それぞれ豊富な水量を供給している。

(3) 峠遺跡

峠遺跡は旧下田街道の奈良本より北川へ下る峠（現三菱地所分譲地内）周辺に位置し、標高180メートルの丘陵東側のなだらかな傾斜地で、眼下に相模灘、大島を望み、晴天には遥か伊豆七島が遠望され、また背後には優美な天城山を望む景勝の地である。

今日までに専門家による本格的な調査が2回にわたって行われているが、当遺跡が縄文時代早期（約9500年～6500年前）の遺跡として注目され始めたのは昭和25年武蔵野博物館々長吉田格氏、横山悦枝氏らによる発掘調査からである。当時、附近一帯はみかん畑で所々斜面を畑に造成するための開墾がなされてはいたが、未だ開発行為の行われる以前であり遺跡の遺存状態は極めて良く数多くの遺物が発掘された。

出土した土器は縄文時代早期の各型式の土器片で、撚糸文系の夏島式土器を最古として撚糸文の施文された土器、押型文土器、沈線文系の田戸下層式土器、田戸上層式土器、条痕文系の子母口式土器、鵜ヶ島台土器など多種にわたっている。また土器の他に石鏃、磨製石斧、黒耀石製の剝片石器、スクレーパー等の石器も多く出土している。

しかし、その後当地は東伊豆町内でも特に温暖かつ景勝な場所ゆえに、昭和30年代早々に別荘分譲地としての開発の的となり、残念ながらその一部は周知の遺跡として保護されることなく破壊、消滅していったのである。

第2回目の発掘調査は昭和62年になって、日本大学講師野中和夫氏のグループによって行われた。

前回の発掘時と同様、縄文時代早期前半の撚糸文土器、押型文土器をはじめ、前期初頭の花積下層式土器、木島式土器や、鵜ヶ島台式土器、粕畑式土器を中心とする条痕文系の土器片、石皿、磨石、石鏃等の石器および黒耀石剝片を出土している。

特に今回の発掘で注目されることは、

早期の沈線文期（田戸下層式を中心とする）から条痕文期にかけての石器製作跡が発見されたことである。この製作跡は神津島産の黒耀石を材料として矢じりを製作したもので、石皿、敲台を中心に剝片が大形のものから小形のものに順次数ブロックに分かれて検出されており、さながら流れ作業による石鏃製作が行われていたことが予想される。また、同所より石鏃の完成品、未成品、欠損品も数多く出土しており、特に形状が多種（十数種類）なこと、および製作跡の規模から見て、石鏃づくりのプロ集団が存在し他集団への供給が行われていた可能性も大いに考えられ、現在我々が想像する以上の社会生活が既に営まれていたと思われる。

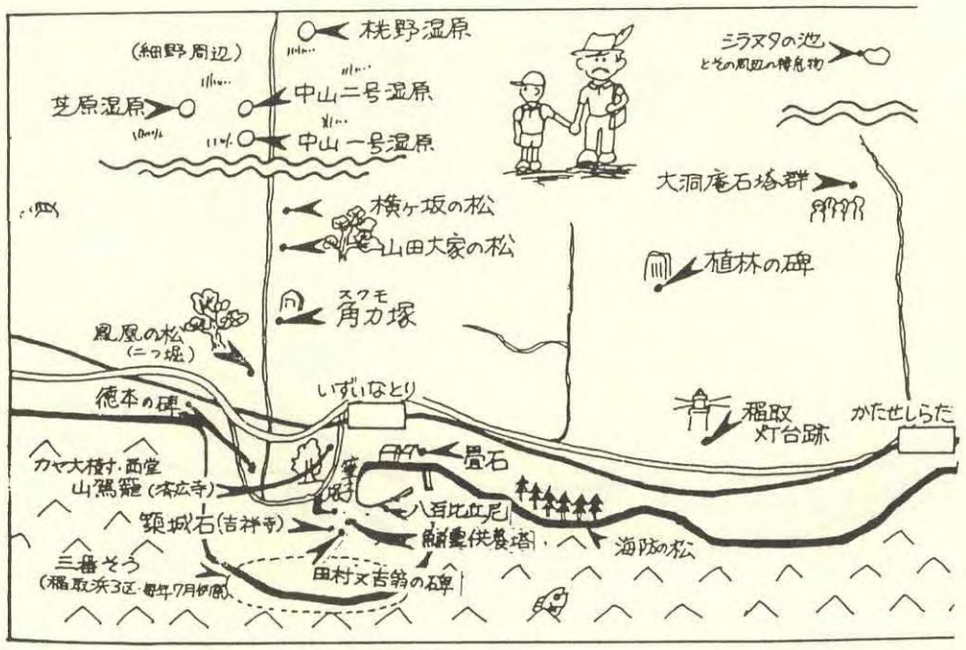
その他竪穴状遺構や土坑（陥穽、墓壙等）も発見されており、遺構の規模は長径約3.1メートル、短径約2.6メートルの楕円形を呈し、火災に遇ったものか一部が炭化しており、その遺存状態は極めて良く、家屋の構造を含めて注目されるところである。

また、石皿、磨石と共に欠損品の垂飾が一点発見されたことも特記に値することであり、今後の調査報告が待たれる。

以上、峠遺跡は出土品の性格、種類および量において他の遺跡には見られない程の豊富な遺跡であり、まさに我国における縄文時代早期の超一級の遺跡である。

2．東伊豆町埋蔵文化財包蔵地

遺跡名	時代	所在地	地目	出土品
栗畑遺跡	縄文	大川栗畑883～890	畑地	石鏃
吉定寺遺跡	縄文（中）	大川吉定寺716他	〃	縄文土器・石斧（打）・石棒・勾玉
宮田遺跡	縄文	大川宮田79他	〃	縄文土器・石棒・石鏃
広前遺跡	〃	大川広前298～306他	〃	縄文土器・石斧
藤沢遺跡	〃	奈良本藤沢1468～1470	〃	石鏃
奈良本峠遺跡	縄文（早・前）	奈良本峠1244他	山林	縄文土器・石鏃・石皿
ドウカン山遺跡	縄文	奈良本ドウカン山1315他	〃	〃
大久保遺跡	縄文（中）	熱川大久保1271他	〃	〃
西ヶ原遺跡	縄文	奈良本西ヶ原	畑地	〃
宮後遺跡	縄文（前・中）	白田宮後90～130他	〃	縄文土器・石斧（磨）・石棒・石臼・石鏃
松峯遺跡	縄文（前）	稲取松峯3325他	原野	縄文土器・石鏃
石上遺跡	〃	稲取石上3322他	〃	〃
アザミ原遺跡	縄文（中）	稲取アザミ原3157～3160	畑地	〃
細野遺跡	〃	稲取細野3148他	〃	縄文土器・石鏃・弥生土器
	弥生（後）			
大洞遺跡	縄文（中・後）	稲取入谷大洞2630他	畑地	縄文土器
荒巻遺跡	先土器	稲取荒巻3220～3224	山林	尖頭器
茶の平遺跡	縄文（早～中）	稲取茶の平3250他	畑地	縄文土器・石鏃・石斧等
長坂遺跡	縄文（中）	稲取入谷飯盛山長坂2453他	〃	縄文土器・石鏃・石斧（磨）
吉久保遺跡	縄文	稲取吉久保2912～2914	〃	縄文土器・石斧（磨）
志津摩遺跡	〃	稲取志津摩2163他	〃	石斧（磨）・石鏃
上の山遺跡	縄文（中）	稲取上の山149他	〃	縄文土器・石鏃
前ノ田遺跡	縄文	稲取前ノ田564.566.567	〃	石棒・石斧（磨）・石皿
天神原遺跡	縄文（中）	稲取天神原402～408	〃	縄文土器・石鏃・石皿・石斧
	弥生（後）		宅地	（打・磨）・弥生土器・土師器
	古墳			
崎町遺跡	弥生	稲取崎町	宅地	土師器・土錘・弥生土器
	古墳			
向三十目遺跡	縄文	稲取向三十目	畑地	縄文土器・石斧・石鏃
穴の沢遺跡	縄文（早・前）	奈良本穴ノ沢	山野	縄文土器・石皿・磨製・石器
向山遺跡	縄文	稲取向山	畑地	縄文土器
下平塚遺跡	縄文	稲取平塚	畑地	石鏃・土師器・須恵器
二ツ堀遺跡	縄文	稲取入谷	畑地	縄文土器・石斧（磨）
大久保遺跡	縄文	稲取入谷	畑地	縄文土器・石鏃・石匙
小麦田ノ上遺跡	〃	稲取字小麦田ノ上	〃	縄文土器・石斧（打）
小山尻遺跡	縄文（中）	稲取字小山尻	宅地	縄文土器・石鏃
又久保遺跡	縄文	稲取字又久保	畑地	縄文土器・石鏃
穴の沢B遺跡	縄文（前）	奈良本字穴の沢	〃	縄文土器（前）・石鏃

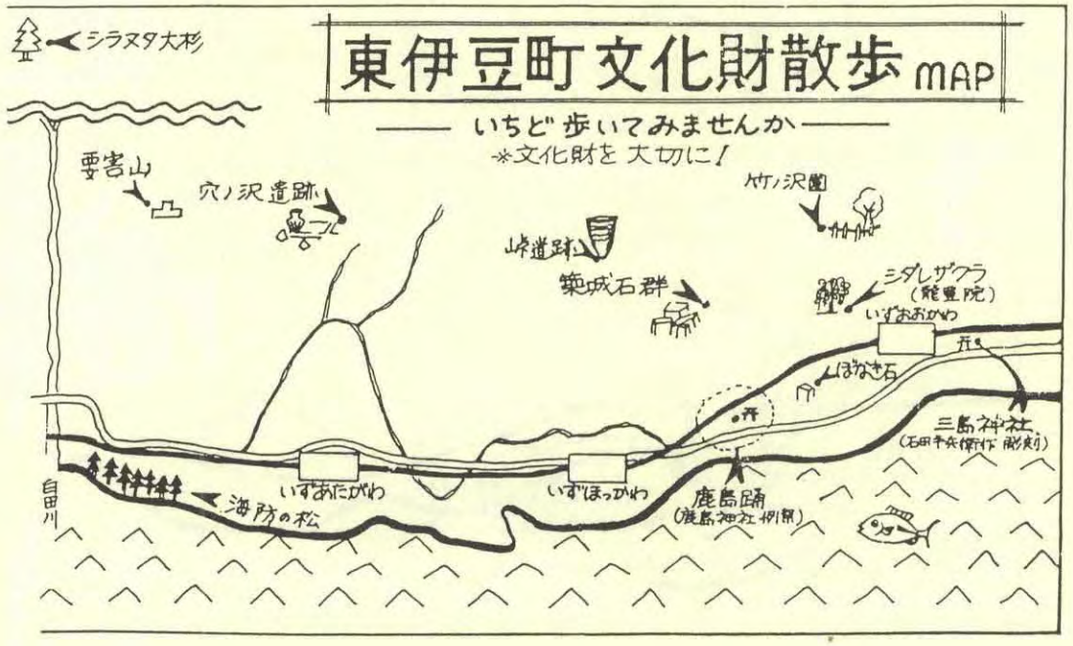


芝原湿原

桃野湿原

鳳凰の松

畳　石



シラヌ田の池

シダレザクラ

峠の遺跡

ぼなき石

3．指定外の文化財

(1) 稲取の句碑

稲取に四基の句碑がある。

(イ) 結構な旭にこぼれけり露の玉

往時、唐沢部落に近い三本松に在った。

下田街道に沿い大島を始め伊豆七島や爪木崎方面の眺望も良く、また稲取港への出船入船や町道を眼下にした所、街道往来の旅人もほっと一息したことと偲ばれる。碑には天保3年7月16日として、作者は、弥右ヱ門と刻まれている。

(ロ) 大空を支ふ老樹の茂りかな

まだ新しい句碑で、昭和14年町立病院の院長であった市川定盛先生、華舟と号すの作、大畑榧寺の境内にある。

(ハ) 老いもせで今日を限りや秋の蝶

作者は鼠白とある。水下鳥沢氏（屋号茶屋の前）敷地内にあり町内から賤間海岸へ下る下田街道沿い周囲に数基の墓石が在り、その中の一つに文化4卯年4月と判読出来るものがあった。

(ニ) 散る紅葉故郷に飾る錦かな

入谷道と長坂道とが交わる所、庚申塔

に隣りして在る。庚申塔には天保14年壬卯年7月と刻まれているが、句碑には年号はなく、作者らしく田栄とのみある。

(2) 御陣屋跡

天明5（1785）年、沼津藩主の水野出羽守忠友は幕府の最高職である老中に任ぜられ、その際、禄高が5000石加増され、都合35,000石となり、それまで天領であった稲取村や白浜村などが沼津藩領に編入された。

稲取村では清光院の隣地に代官宿舎を設け、そこで藩役人が稲取村をはじめ近

領の知行事務を掌るようになった。

天保14（1843）年、沼津藩は伊豆東海岸の領地である白浜・稲取・富戸・川奈に砲台を築いた。設置の理由は、寛政の頃から相ついで来航する外国船に対し幕府は神経をとがらせ、天保9(1838)年と12年には幕府の目付鳥居耀蔵、代官江川英竜に伊豆・相模・安房等の沿岸巡視を実施し相模灘沿岸の海岸防備が迫られたからである。

稲取砲台は伊豆諸島を見渡せる南立野の高台に南に面し、広さ約500㎡で台場周辺には、海岸から運び上げた丸石で石垣を築き、台場から中央に1貫目大砲を据え、北側の隅に火薬庫が配されていた。

この時から稲取村の代官宿舎は様相を一変し、砲台経営に力が注がれた。

弘化3（1846）年4月に沼津藩が奈良本村に鉄砲組を組織した翌月に、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルは、軍艦コロンバス、ヴィンセンスの2艦を率いて江戸湾に来航し、通商条約の締結を求めた。コロンバス号は92門の大砲、ヴィンセンスは18門の大砲を備えた巨艦であったから幕府要人はもとより、これを見た人々は大変な驚きであったと思われる。

直に沼津藩は稲取台場等に一番手兵士を出動させ、稲取村の代官宿舎は正に御陣屋としての役割を強めていった。

嘉永2（1849）年閏4月、イギリスの

軍艦マリーナ号が下田に来航したときには稲取村の押送り船からの情報や、台場での望遠鏡による監視情況など次々と、御陣屋に集り、沼津からは一番手兵が派遣され、奈良本村からは鉄砲組も、この御陣屋にかけつけた。

時代は移り、伊豆は明治2年に韮山県となり、稲取村は菊間藩から菊間県の管轄にあったが、明治4年足柄県に、更に明治9年静岡県に編入された。この間、沼津藩の陣屋は大区小区制による戸長役場として近隣村々の行政事務の舎屋として使用され、その頃の戸長役場文書が今に遺されている。

明治22年町村制施行により、陣屋跡の戸長役場は、稲取村役場となった。この頃、村の医療行政に重きを感じた村の為政者は、医学士西山五郎を村に迎え村立病院を設置した。このとき、病院建物の一部に旧戸長役場の建物（瓦ぶき平屋建）が提供された。明治25年、旧戸長役場跡地に石造2階建の役場が建てられた。

大正9年11月18日稲取村は稲取町になり、石造二階建の役場の玄関には新しく「静岡県稲取町役場」の看板が掛けられ、きれいに飾りつけた「祝町制」のアーチがつくられ、更に各戸には新作の町制祝賀の歌が配られ、小学校々庭に於て祝賀会が盛大に挙行された。

昭和になって、17年11月、役場前の広場に明治時代の村おこし村長「田村又吉」翁の碑が建ち、戦時中には広場に堅穴の防空壕が掘られた。大きな戦争が終り、昭和24年8月には木造二階建の庁舎が落成した。それから10年後、稲取町と城東村が合併し東伊豆町が誕生し石造と木造の二つの建物は東伊豆町役場となり、現在の新庁舎が落成する昭和59年1月まで、町政の中心的建物として重要な役割を果たして来た。

旧役場あと地の活用は遠く古代までさかのぼる。昭和62年8月、この場所の消防施設工事の際、5世紀頃の土師器片、7世紀頃の須恵器片が出土発見されたことにより、この土地は古墳時代からの奈良時代の埋蔵文化財包蔵地であることがわかった。

この場所が人々から「御陣屋」と呼ばれて約200年、今は商工会館が建ち、広場は陣屋跡公園になって人々の集まる場所になった。

(3) 舫（もやい）　石（いし）

場所．正定寺の北側海辺、東区側南防波堤付根

形状．三角むすび（にぎり飯）形で大きいもの2.0m×1.5m×1.5m、小さいもの1.2m×1.2m×0.8mの自然石、一隅に経12㎝または15㎝の穴があけられていて、舫綱を結べるようになっている。現存するもの3個である。

何時頃石に穴を穿ち舫石として使用始めたのか不明であるが、イルカ追込漁にも使われたとの言い伝えもある。

稲取のイルカ漁はかなり古い時代から行われていて、十王堂払にある鯆靈供養塔には文政十丁（ひのとい）亥年（1827年）と建立の年が刻まれている。

イルカ漁は、稲取沖に近づいて来たイルカの群を入江に追込み、東旧堤防（現在の東南防波堤ではなく、正定寺海側から十王堂方向へ築かれていた防波提……現在は形としては認められない。）から向井方向へ網を張りイルカを沖へ逃さぬようにしてから、若い衆が一匹一匹かかえ込んで海から浜へあげた。その網の元綱を舫石に結んだ。その網小屋（現レール

上の所）もあった。

上嶋善太郎（東、弥七様）明治35年生れが明治６年生れの生母から生前聞いた話によると、

弥七様は大正期まで19屯級の縄船の船主でもあり、善太郎氏は若い時自家船で出漁していた。船の繋留は、東旧堤防の石のすき間に丸太杭を立て、舫を取り船を十王堂払の方向へ向けて碇をおろした。舫石は使わなかったと言う。

しかし、大正期には多数の縄船があり、夏の時期船揚場に（現東海汽船事務所の場所）船を上げる意外は海辺に繋留するはずであるから、舫石も使われたと思われる。

ちなみに、稲取における縄船関係を、稲小百年史から拾って見ると、

・文久２年（1862年）この頃稲取の鮪漁船60余隻
・明治24年　釜屋船揚場竣工
・明治35年10月　稲取東波止場築造
・大正３年　縄船３隻に注水式焼玉発動機取り付ける
・大正７年　縄船最盛期、稲取鉄工所製小型機械を船に取り付ける。（稲取鉄工所は弥七様の出資による。）
・大正８年　発動機船20屯級５．６隻、７～８屯級10隻
・大正９年　紀州沖サンマ漁に出漁、縄船90隻
・大正10年　東町浜船揚場防火堤防をつくる。蓮行寺この地から移転、９月25日縄船遭難消防組出動
・大正12年９月１日　関東大震災、津波により漁船42隻流出
・大正13年12月20日　県河川課長港湾築港につき設計説明
・昭和７年　県水産課主催、水産不況打開策座談会を開催
　稲取港第１次改修工事着工（南北防波堤及び船溜）

この頃すでに舫石の使命は終っていたと思われる。この港湾工事に石船はしけ

の引船（現春日丸）に乗船していた梅原茂氏、明治32年生れによると、舫石のことは当時話題にも出なかった。かなり以前から使われてはいなかったのだろうと言っている。

(4)　稲取立野通称お塚について

ここは稲取の八幡神社の神職、稲岡家累代の墓所で、現主稲岡威夫氏の所有地面積、およそ1,891㎡を総称する。

お塚は稲岡家の墓所群を中心に海抜約35ｍの稲取岬中央丘陵地一帯の灌木の散生する中にあって、附近の畑地も含め、すっかり開発が進んでしまった。稲取岬高地一帯の中で自然の態様を残す数少ない残存地として今は貴重価値のある地域

である。かつて幕末期に海防上の必要から領主であった沼津藩主、水野氏が江川担庵の策を容れて築いた稲取台場（砲台）に続く眺望の地であり、砲台跡は後に太平洋戦争では、やはり、旧陸軍の監視所と砲台の置かれた地帯でもあるが、お塚と呼ばれる区域は砲台跡を背にして西側斜面に当り眺望は、むしろ、山側、天城連山、三筋、大峯山に向かういわゆる、西方浄土に面した仏法上の聖地に面した高地で而も稲取岬の付根に当たる。昔からの集落住居密集地である。西町と田町清水地区とは指呼の間にあり、部落の中央からでも老人や子供でさえ、一気に駆け登ることも出来る低い丘陵であるから自然の少なくなった現在、ここが利用されずに残されていること自体不思議さを感じさせる佳境とさえ言えそうである。お塚の名の示すように、昔から稲取の住民にとって一つの聖地として崇敬な

意味をもち、用地の少ない稲取では、長い間、手をつけられることもなく維持されてきた上、尚かつ、稲岡家という旧名家、而も地域きっての聖職である神職家の墓所として大切に整備保全されてきたことは、祖先伝来の崇神敬祖の念の厚い稲取っ子の心意気と相まって開発業者の手も及ばない貴重な残存地になっている原因でもある。

(5) 磯辺神社

建立の目的は、勿論、漁業特に磯物といって天草を始めとする海藻類や魚介類の豊漁を御願いすると共に、その操業期間の海上安全を祈願したものと思う。

往時の磯辺様は、今の伊豆急黒根トンネルの稲取側出口附近にあり、春の磯開式秋の磯終いには幟旗も建ち、多く磯人が儀式に参列した。その光景は対岸の東町、西町からも望むことが出来当時の風物詩でもあった。

現在は黒根の旧水源地南側で港の出船入船を見下す位置にあるが、御神体2基の石質が軟弱な為可成り崩壊している。

漁業組合の専務が中山市太郎さんの頃であり祠内の天井には

昭和43年10月

棟梁　山田和夫

左官　金指○○

の奉納幕が可成り毀損して掲げられている。

今では祭事も見られず、磯開き、磯終いの時、2～3人の海女が参詣する様を時々見かける程度である。

(6) 謎（東伊豆町西町塞の神）

東伊豆町稲取西町の塞の神様に限って祠がある。今は東向きの鉄筋コンクリートの小さいながらも頑固なものにまで昇格した。これは確か昭和50年だったと思う。老人会や、近所の世話人の方々の努力で、細々と上るお塞銭を貯めて、それと基金に区内有志の御奉志を頂いて出来た建物で、それ以前は、明神社の前に北向きに建つ木造の祠だった。それにしても木造、或は鉄筋は別にしても塞の神様が建物の中に鎮座ましているのは珍らしいと思う。町内は勿論伊豆の天城街道や西海岸、東海岸の街道では先ず見かけない。昔、正月14日どんど焼の前夜は、子供達が近所の家でおむすびを作って貰い駄菓子を頂いたりして、お籠りをしたことがあった。

祠の前に小さな広場があり、切火場側の石垣の下から清水が湧き出て土質もこの辺では珍しく壁土であった。寒い時期

でも学校へゆく前の僅かの時間、根っ木をやったことがこの近所の人達にとっては幼い時の想い出の場でもあった。

(7) 硫黄ヶ窪

曽ての白田村、そこは耕地狭隘で、然も海沿ひといっても荒磯のみで、確たる漁業も出来ない村であった。その僻村が、何で幕府の直轄地として、沼津藩や韮山代官から重要視されたのかと、不審に思われてきた。数年前、故人となられた、郷上史研究家、鈴木軍司氏が、長い都会生活を終て帰郷されてから、老人連の会合の場を利用して、その口述や、自宅、或は知友の方々、又町役場等の書庫に残っていた古文書を調査分類整理の上、解読出来るようにして下さったものの中に、この白田村に属する、白田川上流硫黄ヶ窪の歴史を物語る、一こまがある。それによると昨今では国や県などの助成によって護岸、砂防の施設が完備した白田川だが、その南岸沿ひの林道を遡上して、発電所、上水道の水源地、発電所の貯水池と過ぎ、白田の国道からすれば約4～5粁、右はゆるやかな傾斜の杉山、左が白田川から、やゝ離れた平坦地といった所に、ウスバタの滝入口という標

柱が建っている。こゝあたりから国有林になるのか、道路も処々でコンクリート舗装されている。更に何kmか、急傾斜の崖下や老杉の続く昼なお暗い林道を登った処に、硫黄穴の残骸を発見する。戦国の時代を終焉させる為、威力を発揮した火砲、そして後に幕政を維持する為、必要であった銃火器や、鉱山発掘の為や、はた又幕末における、外夷に対する海岸線防衛の為の重火砲に使用された、火薬、その為の硫黄採掘の跡である。薄暗い木洩日の下、湧水の音と雑木雑草のむせるような香りと共に、今も硫黄の匂いが漂よっている。当時採掘に使役され、その報酬金は貧しい農民の家計を、いくらかでも潤おしたことであったであろう。その反面その採掘の残滓の流出によって、

下流の農作物の枯死、海岸の鮑、栄螺、海老、天草等、海草や根付魚等は甚大な被害を蒙った。之等に関する古文書は、鈴木軍司氏の解読整理したものだけでも、寛延二巳年八月（1749）から明治19年（1886）に至る、140年間に及ぶ。又これに関連して硫黄採掘に反対する請願書、明治になってから静岡県令に対する願書等は、52部に及ぶものがある。尚又これらの文書に名を連ねる者も、稲取村、片瀬村、白田村、見高村、縄地村、浜村、谷津村、白浜村、奈良本村、八幡野村、赤沢村、大川村と、広域に亘っている。

白田村硫黄焼出願の儀、拙者共村方より相障りの訳は、四拾余年以前、小長谷勘左衛門様御支配の節、右場所硫黄稼仕候處、石、土砂、焼糟等、海に流出、魚類硫黄に障りし故、此度も相障り候段、委細、先達而申上候に付、右四拾年以前に弐年程の間、稼之由に候得ば、附近の村々・・・・・・有之間敷、早速其節

障り之儀　御許可仕儀・・・・・・

寛延弐巳年八月

稲取村申口

この反対陳情書は同じ年に稲取村白田村片瀬村より夫々、提出されたらしいが、虫喰、甚しく解読困難であり、稲取村の分の最初の部分のみである。

尚、小長谷勘左衛門は伊豆代官として元禄14年（1701）から宝永４年（1707）を在任している。

請　願　書

静岡県伊豆国賀茂郡稲取村

平民　　古屋米吉

外787名

右、古屋米吉外787名謹而申上候私共居村の儀は海辺に沿ふ処の村方にて耕地に乏しく候に付、往古より今日に至る迄殆ど海面に漁魚採藻するを以て生活の道と仕り來り候、実に右漁魚採藻の業に　於て少しく不幸の運に遭遇せる年柄には忽ち衣食に不足を告げ、私共自身は勿論老幼をも顧養するを得ざるに至る事は、古來しばしばの儀に之有・・・・・。

而して私共海面へ流出する一の山川之有、其源地なる白田入天城山内に、字硫黄ヶ窪と申す処ありて、硫黄を産出するより古來、幾度となく開坑を企つる者之有候得共、該所に於て開坑する時は忽ち其水流に汚物を与え、ひいては海面に及ぼし候に付、海中の魚介水藻とも大いに其生殖を妨害せられ為に私共の　・・・・然る処、明治17年３月中本県士族、石井謙次郎共より、右場所に於て硫黄借地開坑の儀、出願仕候得共万一　御許可・・・

明治19年３月

古屋米吉　外　787名

農商務大臣　西郷従道殿

前書の通り願出に付進達候

静岡県賀茂郡稲取村外４ヶ村

戸長　田中彦右衛門

要約して許可に反対する取消請書である。反対運動の文書としては之が最終であり、運動の年代としては元禄末期から明治の中期まで約180年に及ぶものであった。

(8)　片瀬から白田に亘る

要害橋と要害山及び大洞庵

白田川の中流に要害橋という橋と、その右手奥の山を要害山と呼ぶことで静岡県誌には古城の跡であろうと記されている。

しかし可成り前から、いろいろと調べた結果、城跡だと証明する何の遺物もみつからず、縄文時代の石棒らしい石が一個見つかっただけである。一説では、ようがいという言葉は方言で、ようがえ、というのがなまったものだろうともいわれている。

ようがえ、とは用心または要心、なお予備といった昔からの方言がある。この言葉は中部地方から関東地方にまで拡がっていた。要害橋も洪水などで橋が流されても通行に困らないように吊橋のような橋を作ってあったのであろうか？

しかしその白田川の向う岸の白田河内には城山という地名があり、堀の内、矢崎など昔の土豪の砦によくある地名が残っていて、五輪塔や方形印塔などの古い石塔が10数基も残る大洞庵遺跡などもあるので、古城説もすてがたく今後も研究の必要があると思われる。

(9)　江戸城築城石と大久保岩見守

慶長年間、徳川幕府は大久保岩見守を金山奉行として、縄地及佐渡の金鉱を発掘させた事は周知の事実として誰も知る所であるが、江戸城築城当時伊豆石を切

り出し江戸に運んだ事は余り知られていない。

その当時東伊豆町内から築城石（畳石）が切り出されて江戸に運ばれた事実は、大川の谷戸山、アメリカ山及び稲取にも、当時の畳石が未だ沢山残っており、また採石場趾もはっきり残っていることから知ることができる。

大川、北川の境界は旧下田街道の道路脇に、直径２m以上の松の大木であった。その南方30m地点に、鳥沢定太郎氏所有の畠の土手に高さ３m、巾1.5m位の自然石に、のみ跡深く大久保岩見守石切丁場の碑が建っている。この碑の上方の山には築城石（畳石）を採石出来る様な大石が沢山点在している。又その南方500m地点には、畳石を作るのに堀った木の矢穴が20～30とならんだ大石があちこちに残っており、各大名の刻印を堀り込んだ石も多数残っている。尚300m南には、築城石を採石した石切丁場がありその附近には石の破片も沢山あり、また畳石も残っている。

その下にある旧下田街道の傾斜面には、畳石を何十個も敷きつめて石の運搬路を作ってあり、村人呼んで「畳石道路」と名付けていたが、北川農道を作るのに、その上に土を盛って埋めたので、今ではこの石も農道の下になってしまっているが、堀り出せばそのままの姿がみられる。この様に、北川地域からも相当量の築城石が搬出されたことが見受けられる。

因みに、役場庁舎の東端に安置されてある畳石も、北川海岸の波打際にあったものである。又北川漁港の工事の際港内からも小形であるが築城石が揚りお寺の境内に保存してある。

縄地金鉱採堀全盛時代には、鉱夫も3000人とも4000人ともいわれ住居もあの狭い所に1000戸以上も建ち並んでいたといわれているが、大川地区でもこの築城石を切り出す当時は、相当数の人夫が入りこんでいたと思われる。古老の話によると、石工人夫や、運搬人夫、各大名から派遣された役人等の食べる米のとぎ水で大川河が真白く濁ったとのいい伝えがある。何れにしても江戸城築城に対しては、大久保岩見守も大いに貢献されたものと思うが、東伊豆町には当時の築城石に対する文献が何も残っていない。ただ四国の各地の大名が石高に応じて幕府より割当てられた採石記録と古文書により伊豆石及び東伊豆町内の状況を知るのみである。

⑽　かえん船

大川の海岸波打ちぎわから少し沖に、馬の背に似た大きな石がある。
昭和20年頃までは旧船揚場の沖にあり、防波堤から約25m程のところである。

夏ともなれば、子供達の遊び場となり、水泳時には、かえん船までクロールで泳ぎ、帰って来ると、水泳の１級となりかえん船は子供達の水泳の目標とされていた。

昭和８年下田～伊東間の県道が開通する前までは、東海汽船が大川に寄港し、本船まではハシケにて、シキビ、木炭他の荷物を運んでいた。かえん船で遊んでいた大きな子供達は、本船まで泳いでいったものである。

かえん船は現在度び重なる台風の被害により、干潮時にその姿を現わす程度になっている。

かえん船の本当の名は、加兵衛船で、長い年月の間に、かえん船となり、またかやん船ともなり、現在では馬の背に似ているところから馬石とも呼ばれている。

かえん船（大きな石）のいわれは、加兵衛船が本当の名で、今から255年前の正徳３年（1713年）秋、内藤能登守領分奥州岩城国、小名浜の加兵衛船が船頭、水主共に50人乗りにて、米、材木、木炭、薪等を積み、小名浜を出港して江戸に向う途中北東の大風にあい、流されて大久保加賀守領分豆州大川村の海岸に打ち揚げられ難破した事が始まりである。

加兵衛船の乗組員は大川住民に助けられ江戸までの、飯米代並に雑費用として金子１匁２分を用立てて貰い江戸に向った。

その書状が当時大川村の名主であった。飯田恒哉宅に残されている。飯田氏は小名浜まで足を伸し廻船問屋など調査したが、未だくわしいことを知る事が出来ない。現在も調査中である。

⑾　生仏さま

大川字上ミ（通称上ミ耕地）の丘陵地の一角に、その昔から生仏さまと呼ばれている、石祠がある。

室部前面に灯火を撰した透し彫りが施されている。

由来や年代は、何時頃のものか不明であるが、言い伝えによると、五穀を断ちて、鉦の音が聞えなくなったならば、成仏したものと思ってくださいとか、仏の道に入れたと言ふ、言い伝が残されている。

墓地の面積は18坪その中央に石祠が建立されてある。その後方に12基の墓石が横１列に建立されている。五輪塔も建立されていたのか、その１部と思われる墓石も見られる。

木村家の御主人のお話によると、先代の祖父からの話しでは、ずっと以前、何年前か不明であるが、発掘調査などの話もあったそうだが施行されなかったとの事である。

生仏さまの石祠のある所は非常に展望も良く実にすばらしき所である。

前方に三嶋神社を拝しさらに前方に伊豆大島を望み、遥か彼方に伊豆の島々、右前方に愛宕山、北に遠笠山を仰ぎ見る小高き丘で御仏さまは眠っている。

歴史を語る記録は伝存されていないが

御仏さまは長い間世相の推移を見つめられ、部落住民の幸せを願い守り続けて来られたとおもう。

⑿　庵の岩と行者

大川の向田川にそって約3.7K、海抜270米程の処に、庵の岩と言う地名がある。庵の岩は石神大明神と相対し、石神さんの龍を望む丘陵地である。現在では、車で行く事も出来遊歩道も新設されている。すぐ前の大川でアマゴ釣りも楽しめる。故老の話しによると、今から400有余年前、１人の行者が此の地に庵をかまえて、眞言を修し住民の安楽土を築く事を祈願致していたが、修行に励み民衆への布教に尽くしていたとも言われている。庵の岩の並に、石神粟畑と言う地名があり行者は此の地で粟を作り糧としていたとの事である。

石神粟畑は、縄文時代の石砧など出土している事から、粟畑遺跡として、町の文化財指定区域である事から考えると、先住民が居ったのかとも考えられる。

室町時代初期、飯田豊後守源之丞と言ふ人が大川に居を構え、大川を開いていたと伝えられている。

大川龍豊院は、創立弘治元年（1555）年、創立当時は眞言宗であったが、其の後、荒廃していたのを、永禄の初め田方郡中大見村（現中伊豆町）の古刹、最勝院７代の師笑山精眞和尚が此の地に止錫し山号を大川山、寺号を龍豊院とし、曹洞宗を開法したと言われる。

調査した結果によれば、飯田豊後守の２代目、飯田豊後守源左衛門丞の時代に創立したのではないかと思われる。

現在龍豊院の門頭に、樹令約400年以上の、シダレ櫻の古木が有る。シダレ櫻は東伊豆町の文化財に指定されて居り、春は参拝者や道行く人々の目を楽しませている。このシダレ櫻は、なんとしてでも保護して行きたいもである。明治12年の火災での焼損により太い幹も、いたみが甚だしい。

この火災により龍豊院の所蔵品も焼失した為、庵の岩の行者由来も知る事が出来ない。

⒀　植林の碑

表面

本村ニシテ北風の猛烈ナクンバ、村民ハ其ノ不幸を被ラザルモ、地勢ノ備ハラワルヨリシテ、漁夫ハ往々生業ノ途ニ迷イ船舶ハ港内ニ碇泊スル能ハズ、農夫ハ五穀ニ障害を釀シ、村民挙テ、困弊ニ陥ルヤスク、然レドモ未だ卒先ニシテ是ガ改良を図ラザルハ、大ニ遺憾トスルトコロナリ、因テココニ勧業会原野及接続シタル地所ヲ買上ゲ、是ニ松樹ヲ培養シテ風除林トナシ以ッテ積年ノ困弊ヲ救正シ、一ハ永遠の利ヲ得ト本会ノ評決に依リ謹ンデ本村会ニ建議致シ候也

明治22年11月

裏面

本村会ニ於テ決議シタル字黒根ヨリ字上野ニ至ル風除林新設の儀、松及杉桧三十二万本の植付ヲ終了シタルニヨリ実地検査有り、今度報告候也

右報告認定候也

明治24年４月15日

稲取村村長　田村又吉

（Ｓ．52　ふるさと学級資料より）

⒁　稲取入谷字大久保大屋のホルトの樹と熊野神社

この熊野神社と称する詞近く

樹令　　不詳

樹高　　不詳

根廻り　　4.60m

目通り　　2.80m

枝張り　南北22m、東西31m

の俗称葉細の木、ホルトの樹がある。

この神社は古くは熊野權現と尊称し、八代一統の氏神として、延宝年間に八代の大屋、八代藤内左衛門が、今の和歌山県東牟婁郡本宮村鎮座の熊野神社から勧請して、その屋敷続きに奉祭したものと言い伝えられている。

延宝５年11月、元禄15年７月、正徳５年９月、寛保３年９月、寛政10年11月、明治18年４月、更に大正、昭和年間に再建（八代善右衛門、大工久我谷重太郎）された。農事に牛馬が使われるようになり、屋敷内に、神社を奉祠することをはばかり、一段高台となる位置に移築し、その時まで茅葺きであった屋根を瓦に取換えたという、昔から屋敷内には椎、青木、樫、白樫、楠、譲葉、欅、椿などの大樹が多く、葉細の木は特に、太く目立っている。

⒂　大ドウダンツツジ

ツツジ科の落葉灌木、高さ４～６ｍで、暖地に自生するといわれているが、天城山系の万次郎岳頂上より、南すぐ下に大岩が有りその岩より、南に向って、30m位下がった急斜面に樹令100年をこえると思われる、根まわり1.47ｍと1.8ｍ、目通り1.13mと1.32m、木の高さ５～６ｍ、枝張り南北に５ｍ、東西4.4ｍに及ぶ稀にみるドウダンツツジの大樹が２本ある。現在１本はすでに枯れている。

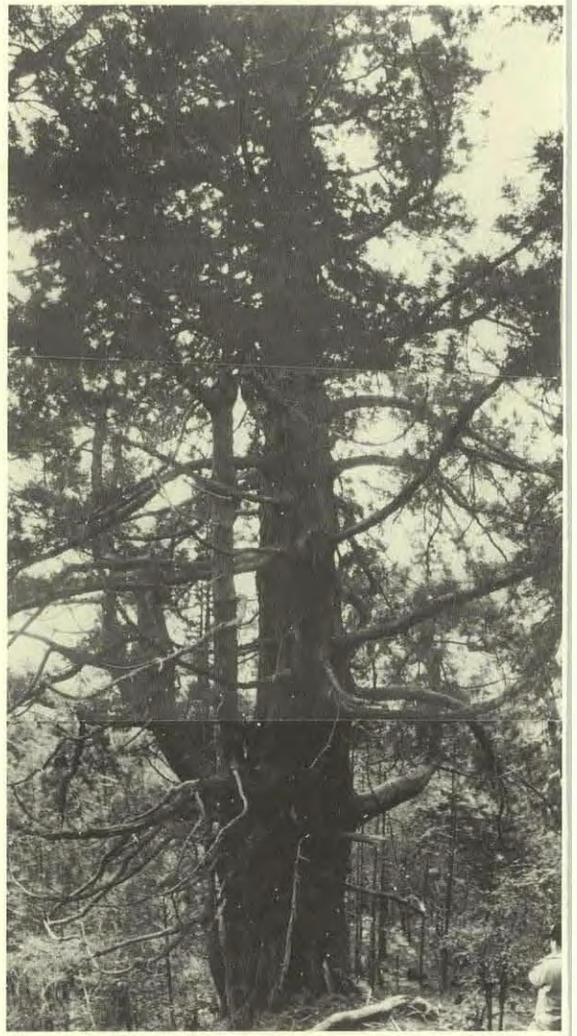
⒃　シラヌタ大杉

シラヌタの池へ下る小径を右手に更に林道を進むと、遥か万二郎岳の山裾に一際そびえる杉の大木が見える。その姿は遠くから見ても周囲を圧倒し、まさに万二郎の景観にふさわしい眺めである。

シラヌタ大杉は河津営林署の管轄内（奈良本国有林242林区内）にあって、推

定樹令1000年以上といわれ天城山はもとより伊豆半島第一級の老巨木であり、幹は永年風雨に堪えた跡を物語るかのように老木特有の縦じわが数条走り、且つその完全な形状は他にあまり例を見ない。

樹高45メートル、根廻12メートル、目通し９メートル、枝張りは東西に約25メートル、南北に約30メートル。昭和56年３月、東伊豆町文化財に指定された。なお、シラヌタ大杉周辺はシラヌタの池周辺の原生林同様に、学術参考保護林に指定されており樹木の伐採はもとより林床植物、苔類等を採集する事も厳に禁止し自然の生態系の保護に力を入れている。



４．旧下田街道（伊豆東浦街道）散策

その地域に住み生活する人たちにとって欠かせない条件の一つである道。現在では国道135号線が整備され、伊豆急行の電車も昭和36年12月９日開通し東伊豆の交通も便利になり、他地区との交流が容易になってきた。

古くから伊豆は流刑の地とされておりそれなりの道も開けていたであろう。江戸時代の初期頃から、伊豆東浦を訪れる他国の人も増えて、鎌倉往還（街道）と呼ばれた海岸沿いの険しい道路や天城越え、海路、港伝いに出入りする者もあったようである。

18世紀後半から伊豆への幕府の要人民間の知識人の訪問が増えてきている。

これは、ロシヤ商船が北海周辺に出没しはじめ、アメリカの捕鯨船が伊豆近海にあらわれ、長崎には西欧各国の船が訪れるなど、日本の眠りをさます外来者が数を増し、江戸の玄関口に近い伊豆、相模の用心のため、幕府が豆相の沿岸防備の施策として奉行配置や見分役人などの派遣をはじめたのがきっかけとなっている。

1793年（寛政５年）老中松平定信が南伊豆を巡視、帰途東海岸を通り片瀬に一泊した史実もある。1824年（文政７年３月）浦賀奉行22代目の小笠原長保が残した甲申旅日記に伊豆東浦の街道の様子が記されている。江戸から三島天城越え、３月24日下田着、25日下田近在を視察、26日白浜、縄地、川津を視察、26日夜稲取に泊る。27日より稲取、白田、片瀬、奈良本、北川、大川の街道を駕篭で行ったらしいが、坂道の多い東伊豆の街道では従者と共に徒歩も多かったように見受けられる。

地図では、小笠原長保が通ったであろうと思われる古道を記してみた。街道の面影を今も残している場所も何個所かあり、当時の旅人の難路での苦労が偲ばれる。

文政七年（一八二四）小笠原長保の見た伊豆東浦甲申旅日記

廿七日。（暁小雨。未明晴陰不同、微寒。巳刻晴）

宿を出て浜辺を行くに、漁家軒をつらねたり。天王坂より山にかゝれば、空曇りたればにや、沖の島々近く見ゆる。

あはいの沢と云ふ所にいたりて、はじめて安房の崎を望む。

大網坂と云ふは、頼朝卿の乗り給ひし、生月と云ふ馬を、網にて捕へたりし故の名と聞けり。山の上に芝生の原あり。左の山奥二里ばかりに、青鈴が池といふありて、この馬に水かひし処といひ伝ふ。今は此池のほとり、梅・桜ありて、春は人も訪来てにぎはふとなん。この峠よりして白田村なり。

白田坂を下りて浜を行く。ここの磯は、大きなる丸き石多し。

此所に年古りたる家有りと聞きければ、浜より左へ一丁余り入て農家に至る。主を倉橋権兵衛といふ。家の造り、柱太く板厚くして、今様ならず。中にも厨の柱の目立ちたれば、片面に扇をもてあつるに、なほ三四寸もたらず。幾年に成るぞと聞けば、八百年も過ぎぬといへり。かぐつちの神の祟をよくるとて、諸人の板を　求むとて、二尺ばかりの板を予にもあたへぬ。

この家の在りは、軒ばたに山重りて、仰ぎ見るに中にもことに高き山尾上にのみ雪の積りて、其外は芝生の山なり。何時降りたる雪ぞと問ひければ、よべ降りて只今やみぬといへるぞ、辰の刻ばかりなりける。いつもなべての山に積らでも此尾上のみにかくつもりける事ども有りといふにぞ、高さは知らるゝ。此上は天城山の内にして、番次郎といふとぞ。

　立出し稲とりむらの寒けさも思ひ白田の峯の白雪　天城山ふりつむ雪の白田村春忘れたる風の寒けさ

ここを出て浜に出れば、川奈村の崎、富戸村の上人崎、丑の方に見ゆ。此辺り、大島・利島・新島見えて、いと近し。大島は十里をへだつとも、又九里とも云へるならん。

しばし行きて、村堺の石川あり。白田川とも片瀬川とも云ふ。橋より十七、八丁にして海に入る。三瀬に流れて、板橋三つかけたり。所々 矼 もありけり。

二十六日稲取村に宿る　　三月二十五日下田近在視察

　春ながらはしろの山に雪ふれば片瀬河原の風さゆる也

同じ事ながら、いともいとも寒きまゝに、いくたびもいふなり。

渡りすぎては片瀬村なり。此村はするめいかを餌にして、まぐろといふ魚を釣るに、糸を百尋も下げて一本釣をするといふ。

そのほかは浜の砂利を舟に積みて出すを生業とすると聞けり。

坂をのぼりて山を行くに、海面のながめよろし。

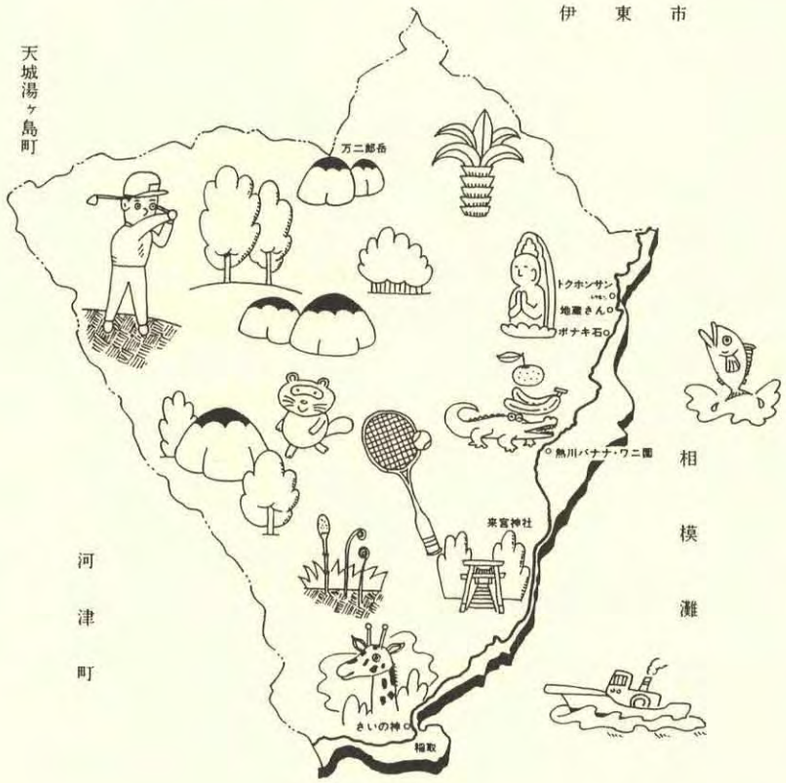
奈良本村、山越下る坂あり。

同じ処の枝郷に、ほっかはといふあり。

ここも山越なり。

大川村、浜を行く。此村は櫨を多く出せり。ここより大島へ七里といふ。

川を渡りて向坂・七曲坂といふ嶮しき坂を登りて山路なり。この山中に美蘭樹といふ木あり。幹は赤松に似てやはらかく、枝葉百日紅ににて、皮の色はうすくれないにしてにび色を帯びたり。こん月に開きぬくべく花のつぼみ多くあり。



第3節　東伊豆町各地区の年中行事

1　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前にあった行事）
1． 2． 3．	元旦　㊐蓮行寺修正会　㊐成就寺国家安泰祈願 ㊅栄昌院祝聖（毎月1．15日に行なう） 書初、乗ぞめ、太子講 （正月）（せち男）	㊅刈り切堀り（青年会） ㊋初集会㊝ヒマチ
4．	㊋神福竹　㊐大畑石尊様	㊋大集会
5．	消防出初式	
6．	㊐権現様	
7．	七日正月、七草、㊝船おろし神社参り	
11．	鏡開、蔵開	
14．	ドンド焼、塞の神（道祖神）	
15．	成人の日　㊅成木責め　㊐済広寺大般若　㊝花だんご ㊝㊅龍宮神社	
16．	㊐弁天様（赤池弁財天）　㊐愛護地（福田講毎月16日）	やぶ入り
17．	㊅㊝山の神　㊐熊ヶ沢権現（重内毎月17日）	
20．	初夷申様　㊝蛭子神社　㊝初えびす　㊐浅間神社	
27． 28．	㊝若宮神社　㊝㊅道了尊講 ㊐諏訪神社 ㊐向井石尊様	
その他．	太子講	

2　月

（日）	（現在行なわれている行事）	
1． 2． 3．	㊐済広寺修二会 ㊐清光院淡島明神	
8．	㊗片菅神社春祭	㊝目一つ小僧
11．	建国記念日	
15．	吉祥寺、善応院涅槃会	
27．	㊝鹿島神社春祭	
その他．	初午、立春、節分　㊋西町明神様祭	

3　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
3．	ひな祭	㊝㊅㊋いそものとり
20前後．	被岸、中日　㊅山焼　㊅道つくり	㊋磯遊び
その他．	卒業式、年度変り、農業祭	㊋小学校学芸会

4　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
8．	花まつり	
13．	㊅㊋水産まつり	

5　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
1．	メーデー	㊋夏冬漁期切かえ日
2．	八十八夜	
3．	㊙町民体育大会	
5．	端午の節句	
17．		㊅山の神
27．	㊝若宮神社　㊝道了尊講　㊝成田講　㊝三峯講	
その他．	立夏	㊝焼米

6　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
15．		㊋天皇様祭
その他．	農休み（下旬日曜日を含む2日）　㊋どんつく祭	

7　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
6．	㊝㊅七夕	
13．	㊉三島神社	

14.	㊥八幡神社	
15. 16. 17.	㊞天王様（素盞嗚神社） 祭典 ㊅入谷各社	㊕天王様（片菅神社に合祀）
18.	㊞磯辺様	
28.	㊞向井石尊社	
その他.	海上大文字焼㊟	

8　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
6.	七夕	
7.	㊞清光院施餓鬼法要	
8. 9.	㊕片菅神社むし干	
10.	㊞吉祥寺施餓鬼法要	
12.	㊞済広寺施餓鬼法要	
13. 14. 15. 16.	㊞善応院施餓鬼法要 ㊅栄昌院施餓鬼法要　㊇龍豊院　㊝自性院 うら盆 ㊞蓮行寺盂蘭盆会　㊕龍淵院　㊞普応院、東泉院施餓鬼法要 ㊞成就寺施餓鬼法要　㊛瑞雲院施餓鬼法要 ㊥正定寺施餓鬼法要　しょうろう流し	やぶ入り
27.	㊞諏訪神社	
28.		
その他.	旧7月26夜様	

9　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
8.	㊤はんまあ様	
17.	㊇山の神	
20前後.	被岸、中日　㊇道つくり	
27.	㊥若宮神社	
その他.	旧暦8月15日、15夜　㊥八幡神社祭	

10　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
9.	㊕片菅神社祭	
10.	㊤町民体育大会	
14. 15.	㊝水神社祭 ㊛龍神祭	
16.	㊅入谷各社まつり（八代、田村、山田）	
20.	㊛㊥蛭子神社	㊤町民体育大会
25.	㊐来宮神社祭	
26. 27. 28. 29.	㊛鹿島神社本祭 蓮行寺報恩講 ㊇三島神社祭	
30.	㊇龍神まつり	
その他.	旧暦9月13日十三夜　㊕道つくり　㊅防火線	㊇ガス網

11　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
1.	㊅赤松神社　㊞清光院達磨忌	
4.	㊞大畑石尊神社　㊞善応院達磨忌	
5.	㊞済広寺達磨忌	
12.	㊞成就寺宗祖の御会式	㊞まんど
14.	㊥正定寺十夜法要	
15.	七五三祝	
27.	㊛鹿島神社秋祭	
29.	㊇三島神社大祓	

12　月

（日）	（現在行なわれている行事）	（以前あった行事）
1.	川びたり	
8.	㊞済広寺成道会	㊛目一つ小僧
23.	㊅栄昌院開山忌	

28.　もちつき	
30.　もちつき	
31.　㊥船すり、大晦日、正月の準備	
その他.　冬至（かぼちゃ　㊨ゆず湯）　夜警	すすはらい

無印：全町的なもの、又は全国的なもの

㊥：稲取地区　㊐：白田地区

㊤：大川地区　㊅：入谷地区

㊨：北川地区　㊞：田町地区

㊝：奈良本地区　㊏：西町地区

㊡：片瀬地区　㊟：東町地区

※北川では昭和15年までは正月、ひなまつり、七夕、七五三は月遅れで行なわれていた。
しかし端午の節句だけは５月であった。

第4節　昔話

○　ぼなり石（ぼ泣き石）

大川にある谷戸山の石切場から大きな築城石が切り出されていた頃のむかし話です。

徳川幕府が、江戸城をつくるのに使う大きな石を家来の大名に献上せよと命令を出しました。

江戸に近い伊豆に築城によい石があるということで多い時には、3000隻もの船が伊豆にやってきました。1隻の船が300人持ちの石を2つ月に2回も江戸へと運ぶのですから、谷戸山に入ると、それぞれの大名は、自分の石であることを証明するために石に刻印をしました。

刻印の中には、「㊗」「㊂」「8」と、いろいろありました。

大川の広前の岡は、現場かんとくの武士や石を運び出す人、めしのたき出しをする人と、たいへんな人でにぎやかでした。石を切って運び出す時には、いくさの時のようなすさまじさでした。

かんとくの武士は、石の上に乗ったり、指図をするのですが、仕事に狩り出された人夫たちは、馬や牛と同じように働かされていました。

石を運び出す時は、とてもたいへんでした。登り坂になると百姓の肩からは、血がにじみ出るくらい綱を引っぱり、下り坂になると勢いついた大きな石の下敷になって、けがをしたりして死んだ人も少くありませんでした。みんなは、そんな時には、力を出しあい仲間を救い出し、はげましあいました。

「権平さん、だいじょうぶかね。もう少しで日が暮れるぞ、がんばれよ。」

「これから先、この仕事はどのくらいかかるかなあ。」

「徳川様かなにか知らないが、おれたちは、つかれてるよ。」

「百姓も、けがををすれば血が出るさ。かんだるくもなるさ。」

牛や馬のように働く百姓にとっては、お天様(てんとう)様が山かげにかくれる時が一番楽しみでした。

次の日、東の海からお天様(てんとう)様が顔を出し小鳥が歌をうたい出すのを合図に、また、大きな石を運び出しはじめました。

ところが、ある日、大きな石を運んでいると、押せども引けども、根がはえて大地にしっかりつかまえているのか、びくとも動かなくなってしまいました。

とうとう、その日は、日が暮れてしまいました。次の日に仕事をすることになりましたが、次の日も、次の日も、村人は、いっしょうけんめい海岸まで大きな石を出そうとするのですが、動きませんでした。

「わしゃ、動かんぞ。だれがきても江戸なんかへ行かんぞ。大川から出ないぞ。丸のうちの二つかりの紋をつけたからといっても江戸なんか行くものか。」

と言っているようでした。

かんとくの武士もあきらめて、ほかの石を運ぶことにしました。そして、予定の石を運び出すと江戸へ帰っていきました。

大川の村里は、もとのように静かになりました。

ところが、夜になると、どこからともなく

「ボワー　ボワー」

と、泣き声に似た声が聞えてくるというわさが、村人の間に広がりました。泣き声をたよっていくと、なんと大きな石のところからでした。

「ああ、あの泣き声は、石を運ぶ人足にかり出された百姓が、仕事の苦しさに泣いたのだ。」

「いや、江戸にいくのがいやだと、泣いたのさ。」

と言う人々のうわさ話が村中に広がり始めました。

この頃から、村人たちは、大きな石のことを「ぼなり石」というようになったということです。

（この大きな、ぼなり石は、大川地区の旧道135号線の脇においてあります。）

（南国伊豆の昔話より）

○　はんまあさま

むかしの話だよ。稲取の漁師やあ、漁がなくて陸にあがったカッパのようなものだった。

そんなある日、浜に出て、沖をみているちゅうと、りゅうごん様の沖に、鳥やまがついてな、そりゃ空は鳥でいっぺえだったちゅうことだ。

鳥やまがついたちゅうことは、そのまわりに、いっぺいハミがあって魚がいるちゅうことだ。

漁師やあ「そら、漁がある。」ちゅうことで、すぐに船を沖に出して、鳥やまえ

みえるところへ行ったちゅうことだ。

そうしてみるちゅうとな。板をいかだに組んだ上に、武士が、きずだらけになって、みんな、息たえていたちゅうことだ。

たたけえに破れた武士が海にのがれようとして、仏様になって、稲取沖に流れついたちゅうことだ。

魚じゃねえからって、仏様をそのまま見のがしてくるわけにゃいかねえ。

海で働くなかまのおきてでな。漁師の人たちゃ言ったそうだ。

「おめえら、うかべてやるから（てあつくほうむってやるから。）稲取の漁師に、漁をさせてくんの、いかと、さんまをたんと、とらせてくんの。」ってな、おねげえしたちゅうことだ。

ねんごろにまってやったそうだ。

それからちゅうもんは、いかとさんまのとれる秋ぐちになるちゅうとな、たあんと漁があるようになったちゅうことだ。

とれるときにあゃ、おめえ、浜じゅう

さんまあといかで　まっ黒になった時もあったもんだ。だあれも買いてがなくて畑のこやしにしたこともあった。いま考えてみると、うそみてえな話だ。

めかごを持って　浜にいって海に泳いでいるさんまあを手づかみにしてとったこともあったからな。戦争が負けてからも、一どたあんと取れてな。船のあかりについて磯のつぼらに入ったのを手づかみで　ひろったり　つかめえたりしたもんだ。

稲取の漁師じゃ漁をさせてくれる、仏様におれいをしなきゃってな。毎年　9月8日になるちゅうと、はんまあさまちゅってな、おまつりをしたもんだ。

はんまあさまはな、はんまあさまの葉っぱ（はまゆ）をとって、武士の姿をかたちどって（奇数つくる）　いかやさんまの形をもつくって神さまにおそねえしたもんだ。

はんまあさまは、そこの家によって数は違あけど奇数作ることになってな、みんな左まえの着物に松葉の刀を一本さして　おぼんに乗せておくのだ。左前の着物は死人に着せる時だからな。

漁師の家じゃ、はんまあさまをつくるちゅうと、かしわばもちやすしをつくったりして、8日の晩は、いわったもんだ。

9日の夕方になるちゅうと、神さまからはんまあさまをさげて、子どもらが　浜にいって、「いかとさんま、たんと　とらせてくらしぇよう　おとったんらにいっぺえ、いかとさんま　とらせてくらっしえよう。エーン　エーン。」ってな泣きまねをして、はんまあさまに　おねえげえしたもんだよ。

おぼんは塩水で　きれいに洗ってきたもんだったちゅうことだよ。

○　太田の大蟹

むかし、むかし、天城のふもと奈良本

にあったお話です。

奈良本の太田というところが、まだ池だった頃、池にたまった水が、入赤川に流れ、村の田んぼの稲作りにたいへん利用されていました。入赤川には、太田の蟹といって、たたみ20じょうぐらいの甲らをした、それはそれは大きな蟹の主が住んでいました。

ふだんは、あまり人目につかない大蟹も、稲穂がずっしりする秋の夕暮れになると、どこからか、どうしてやってくるのか、太田に現われては、村人が、丹精こめて作った稲を大きなはさみで切りたおしたり、大きな体で踏みたおしたり、時には、田んぼに大きな穴をあけて、稲作りができなくなることが、たびたびありました。

しかし、あまりにも大蟹のこと、そのたたりや仕返しを恐れて、村人たちは、どうすることもできませんでした。

「ゆうべ大蟹が出て、吾作さんちでは、おおそんがいを受けたよ。」

「となりの田んぼは、大きな穴をあけられたってよ。」

と村人たちは、大きな蟹の話にもちきりでした。

たびかさなる大蟹のいたずらに村人たちは、ごうをにやして、今夜こそ、にくき蟹めに、ひとあわふかせてやろうと村の中でも豪の者といわれている作兵衛さんを先頭に大蟹退治に出かけました。みんなは、大蟹を見ると恐しくて立ちすくみ、家に逃げ帰るのがやっとのことでした。家に帰ると、ふとんをかぶり、ガタガタふるえて寝こんでしまいました。

村人の困り果てたようすをみて、庄屋の太郎左衛門さんは、奥座敷で、この先のことを考え、腕ぐみをし、思案にくれていました。しばらくすると何を思ったのか、すくっと立ち上って、かもいにかけてあった弓矢を持つと、夜のふけるのを待って太田の池へと出かけていきました。

木かげに身をひそめ、今か、今かと大蟹を待っていました。生ぐさいにおいがあたりにただよい、ザワザワという音が聞こえたかと思う間もなく、大きなつめを暗い空に広げた大蟹が現われました。

太郎左衛門さんは、身をひきしめ

「今宵(こよい)こそ、目にものみせてくれるぞ。村人のためにも……。」

と、ころ合いをみはからい、かねて用意してあった家伝の弓矢をキリキリと引きしぼりました。

(南無(なむ)、わが家の守護神、この矢で大蟹を打ち倒すわれに、力を与えたまえ)

と、願いをこめて、ヒューと矢を放つと矢はみごとに蟹の甲らに突きささりました。

太郎左衛門さんは、息つくひまもなく、二の矢を放ちました。それもみごとに突きささりました。

大蟹は、夜明けまでのたうちまわりましたが、ズシンと倒れると息がたえてしまいました。

静かな朝が来ました。村人たちは、ゆうべの大きな地ひびきの聞こえた太田の池に集まりびっくりしました。息がたえ大地につめだてしている大蟹をみて、度(ど)肝(きも)をぬかれ、腰をぬかす者まで出ました。

大蟹のまわりには、何百何千という小蟹が集まり悲しんでいるようにさえ見えました。

村人の中には、にくい大蟹をひと打ちして、今までの気分を晴らそうとする者もいましたが、太郎左衛門さんは

「蟹とはいえ、小蟹から、こんなに親われているのを見ると人ごととは思えない。打つのはやめて下さい。」

と村人をさとしました。

太郎左衛門さんと村人は、相談して森の中に蟹の祠をつくりました。祠がまつられている所を蟹が森と名づけました。奈良本の人々は、かわいそうな小蟹のことを思い、今でも小蟹を取って食べることはしないということです。

(南国伊豆の昔話より)

○　おしょうさんといたずらきつね

むかし、稲取にあったお話です。

日が暮れようとしていた村の広場で、おおぜいの人々が頭をよせあって志津摩のきつねに、どうしたらいたずらされないですむかと、相談していました。

「わなをかけたらいい。」

「鉄砲でうつのがよかるべえよ。」

「鉄砲でうつちゃかわいそうだよ。」

と、なかなかよい考えがみつかりませんでした。

「そうだ、正定寺のおしょうさんに聞いてみるべえ。おしょうさんは、ちえがあるおかただもの。」

と、五郎じいさんが言ったので、みんな賛成しました。

お寺に出かけると、おしょうさんは、夜のおつとめがちょうど、おわったところでした。

さっそく村の人たちが、きつねの悪さの話をすると、

「うーん。」

と、おしょうさんは、腕ぐみをして考えこんでしまいました。

しばらくすると、おしょうさんは、何を考えたのか、

「よし、よし、よし。」

と、言いながら立ちあがりました。そし

て物置小屋から使い古しの雨がさを持って志津摩へ出かけて行きました。

村人たちは、どうなることかと心配顔で見送りました。

おしょうさんは、村はずれのお地蔵様の所に腰をおろして、ひとりごとを言い始めました。

「わたしの寺に伝わるふしぎな力を持つかさだ。きつねがさすと、人間に見えると言い伝えがある。となりの作平じいさんが、ほしがるのも無理はないなあ。おっと、こんな話をきつねに聞かれたら大変だ。ああ、年をとると、いらないことまで、おしゃべりしてしまう。お地蔵さん、おやすみよ。」

と、言いながら、ちょうちんに火を入れる時、お地蔵様のわきに、あんな大切だといったかさを、おき忘れていきました。

お地蔵様の後で、この話を聞いていたきつねは、

「シメ、シメ。」

と、あのふといしっぽを2、3回、大きくふってよろこびました。

きつねは、かさを持つと、ためしてみたくなりました。そして、おしょうさんの行く道を先きまわれして、おしょうさんの前に立ちふさがって、

「おしょうさん、おばんです。」

と、あいきょうたっぷりに言いました。

おしょうさんは、

「どこのおかただな。ちょっとおみかけしないおかただが。」

と、もの静かにたずねました。

きつねは、

「どこのおかただね。」

と、言われたことばに気をよくして、志津摩に帰って行きました。

おしょうさんは、村の人々の待っている正定寺へ急ぎました。お寺に着くと、

「村の衆よ、志津摩に行ってきましたよ。これからは、『見海山正定寺』と書いてあるかさをさして、きつねが出てくると思うよ。おなかのすいているきつねが、食べ物ほしさに出てくるのだから、その時には、持っているものを、わけてやって下さいよ。悪いいたずらもしなくなると思うよ。」

と、村人をさとすように話しました。

村人は、おしょうさんの話にうなずき、安心して家へ帰りました。

こういうことがあってから、きつねが出てきても、志津摩を通る村人は、悪いいたずらや、困ることに出合うこともなくなったということです。

そして、いつとはなしに、きつねは、志津摩の山を越え、どこか遠い所へ行ってしまったということです。

「あのきつねは、どこへ行ったんだろうなあ。」

「しっぽの大きい、目のかわいいきつねだったなあ。」

「元気で生きているだろうなあ。」

野山で働く村人たちの間には、こんな話しがかわされていました。

見海山　正定寺は、稲取の東町にあるお寺です。

（南国伊豆の昔話より）

○　狐火

霧が低く立ちこむ夜道を、朝太は傘を片手に疲れも忘れて、我が家に急いだ。

奈良本自性院の墓を過ぎ登り坂にさしかかった所まで来ると、白い物体がかすかにゆれ動いている。「はては何者かと」度胸を決め右手に傘を握り怖れずに近寄って行く、よく見るとなんの事はない糸の切れた凧が木にかかり静かにゆれていたのである。

朝太は、時期はづれになんで凧なぞ揚げたものか。」とぶつぶつ一人言を言いながら峠に向かう。峠からの道のりはだらだらの下り坂となり、小走りに走り抜ける。北川の民家の灯火が、一つ二つと見え出す。もう一坂越えれば大川だと、元気を出して歩を進める。

北川の峠にさしかかる手前で一呼吸入れ、後を振り向くと遠くに灯火が見える。誰かが来るのかなと待つ事としたが、なかなか近づかない。いたしかたなく歩き出すと、灯りも歩き出す。止まれば灯りも止る。

朝太はようやく感ずいた。これは狐がついて来たなと、そこで朝太は、よし今度は自分が狐をだましてやる番だと、楽しくなって来たのだった。峠を越え急な下り坂を過ぎ、大川の障子洞まで来た時には狐火も近く迄来ていた。障子洞は杉の大木が繁り昼でも暗いようなところである。朝太は驚怖心から楽しさに変心し狐の近づくのを待つ、場所はいくらか平坦であり最高の場所だ。狐火は近づいて来たので、下駄をすっぽかしたようなふりをして、体をかがめ狐火がそばに来るのと同時に、無我無中で大声を張りあげて狐火に飛びついた。確かに手ごたえがある。固く握り締めた掌に、狐の提燈捕まえたと、いっ気に里まで駆け出した。

才の神様の所まで来た時、詰所に行く青年と出逢い「俺は今障子洞で狐の提燈つかまえたぞ。」と友人に告げると、友人は「嘘づらじやぁー。」と本当にしない。「嘘だと思うなら見て見ろよ。」とやりかえした。二人は石橋下の暗がりで見る事にし、静かに手を開いて見ると光っているではないか、友人はおったまげて、「すげーいなあ。」の一言、そこで二人は明るい所まで行き良く見ると、なんと木の葉が4、5枚手の平にあるのみであった。

朝太は兄の家に立寄り今までの出来事を話し、暗い所で見ると光っている。その後村里では狐の提燈が話題にのぼったのであった。

第5節　わらべうた

◎正月を楽しみに待つわらべ唄（明治）

○「正月はよいものだ
　角石（すみいし）のような餅を食べて
　雪のようなまんま食べて
　　あかぎれ足に　足袋　雪駄　」

◎羽根つき唄（明治、大正）

○「ひとごに　ふたご　みばたきゃ
　よめご　いつのこしゃ　むかし
　なゝつのおびを　やのじにしめて
　こゝのまえを　とうらせぬ　　」

◎おじゃめ唄（お手玉の唄）（明治、大正、昭和）

○「さいりょう山は霧ふかし
　ちくまの川は波あらし
　はるかに聞える物音は
　さかまく波か　つわものか
　川中島のたゝかいは
　負けるも勝つもいさましや　　」

◎おじゃめ唄（大正、戦前）

○「青葉しげちゃん昨日は
　いろいろお世話になりました
　私は今度の日曜に
　東京の師範へまいります
　皆さんよくよくお勉強
　　なされて下さいたのよます　」

◎おじゃめ唄（明治、大正）

○「みこしどこゆく　かずさの山へ
　かずさ山から　谷そこ見れば
　小さな子供が小石を拾って
　紙につゝんで　こう屋へ投げた
　こうやの番頭さんは金だと思って
　あけてみたらば　小石でござる
　花さきゃ　ひらいた
　あずまな　つぼんだ
　くわいが芽を出した
　エッサッサ　じゃんけんぽん　　」

○「おさらい
　おひとつ　おひとつ
　　おひとつおろして　おさらい
　おふたつ　おふたつ
　　おふたつおろして　おさらい
　おみっつ　おみっつ
　　おみっつおろして　おさらい
　おみんな　おさらい

　お手のせ　お手のせ
　　お手のせおろして　おさらい
　お手つり　お手つり
　　お手つりおろして　おさらい
　おう手ばたけ　おう手ばたけ
　　おろして　おさらい
　おうちり　おうちり
　　おろして　おさらい
　おういし　おういし
　　おろして　おさらい
　おつかみ　おつかみ
　　おろして　おさらい
　おんばさめ　おんばさめ
　　はさんで　おさらい

　お馬の乗りかえ　お馬の乗りかえ
　お馬の乗りかえおさめて
　　おさらい
　お左（ひだり）　だりだりしょ
　仲よし　妻よし　さらりと
　　おてつき　おさらい
　てきねっぷし　おまえの好きな
　　は、およめにいっても
　つとまらぬ　つとまらぬ
　つとまらぬおさめて　おさらい
　おおひる　おおひる
　　おろして　おさらい
　やっちょの　やっちょの
　　おろして　おさらい
　小さな橋くぐれ　小さな橋くぐれ
　　くぐって　おさらい
　おたいこ橋くぐれ、お太鼓橋くぐれ
　　くぐって　おさらい
　大きな山のぼれ　大きな山のぼれ
　　のぼって　おさらい
　さらりこ　やんちゃん
　　だりだりしょ
　おひとつえの　おんばさめ
　おふたつえの　おんばさめ
　おみっつえの　おんばさめ
　あたり近所衆の子供を呼んで
　おらのこの子に　はし持たせ　」
　　（戦前、戦後）

○「いそのつぼらに
　はとが三びきとまって
　そのはとは　なんとなきます
　にゃん　にゃんとなきます
　まずまず　一貫かしました　」
　　（戦前、大正）

○「おんどらどらどら　どら猫さん
　ぶち猫さん
　わたしとおまえとかけおちし
　吉原たんぼの　まん中へ
　小間物店屋をだしましょか
　一二三四五（ヒフミヨイ）
　いつも姉さん　花のお江戸へ
　　のぼるとおっしゃる」
　　（大正、戦前）

○「一で参りましょうか
　　わしゃ一は言わんで
　芸者さんとは　なんのことだ
　　一を言って参りましょ
　わしゃ一を言わんで
　　その手をかえす

　二で参りましょうか
　　わしゃ庭はかんで
　女中さんとは　なんのことだ
　　庭はいて参りましょ
　わしゃ庭はかんで
　　その手をかえす

　三で参りましょうか
　　わしゃ棹さゝんで
　舟頭さんとは　なんのことだ

棹さして参りましょ
わしゃ棹ささんで
その手をかえす　」
（大正、戦前）

○「いちもんめの　いすけさん
一の字がきらいで
一万、一千、一百石、一斗、一斗
一斗までお蔵に納めて
にもんめに　まわした
にもんめの　にすけさん
二の字がきらいで
二万、二千、二百石、二斗、二斗
二斗までお蔵に納めて
さんもんめに　まわした
（以下、四匁目、五匁目と続く）」
（戦前、戦後）

○「あんた方どこさ　肥後さ
肥後どこさ　熊本さ
熊本どこさ　せんばさ
せんば山にはタヌキがおってさ
それを猟師が鉄砲でうってさ
やいてさ　くってさ
それを木の葉で一寸かぶせ　」
（戦前、戦後）

○「もうもや桃や　流れが早い
洗濯すれば　おべべがぬれる
うんとこどっこいしょ　」

○「いちりっとララ　らっきょ食って
キャッキャッ　きゃべつでホイ」

○「でんきが消えた
電気屋さんをよんで来い
もうついた　」
（戦後）

◎なわとび唄

○「大波　小波　ぐるりとまわって
まーたいた」

○「郵便屋さんの落としもの
ひろってあげましょ
一枚、二枚、三枚、四枚……　」

○「クマさん、クマさん　片足あげて
クマさん、クマさん　両手あげて
クマさん、クマさん　後をむいて
クマさん、クマさん　おりなさい」

◎手を打って歌う動作をする

○青山ぼちから東を見れば。見ればね。
見れば見るほど　涙がポロポロポロポロ
その涙をたもとで　ふいてね。ふいてね。
ふいた　たもとを　たらいで　じゃぶじゃぶじゃぶ

◎お手玉（オジャンメ）かぞえ歌

○一番初めに一の宮
二又日光東照宮
三又さくらのそう五郎
四又しなのゝ善光寺
五つは出雲の大社
六つは村々ちんじゅさま
七つは成田の不動さん
八つはやわたの八幡宮
九つこうやの弘法さん
十は東京しゆぜんじ

◎こぐり戸

○家のこぐり戸は
こんぐり　づらい　こんぐり戸
こんぐり　つければ
こんぐり　良くなる
こんぐり戸

◎子守唄

○大島の子供ら
花を採りに　行かないか
何んの花　採りや
仏に進ぜる　菊の花
一本採って　腰にさし
二本採って　たもと入れ
三本目に　日が暮れて
じんじ山へ　泊まろうか
ばんばあ山へ　泊まろうか
油へ泊まって　油一升こぼした
その油　どうした
太郎さんの犬と次郎さんの犬と
なーめ申した

◎羽根つき唄

○一人（ヒトリ）来な
二人（フタリ）来な
見（ミ）んな来な
四（ヨ）って来な
五（イ）つ来ても
六（ム）づかしい
七（ナ）んのこつた
八かましい
九うの前は
十せんぼう

◎手まり唄

○とんとん隣の　おばさんが
とんからとんから　はたを織って
京へ　ケリメン織りにやり
可愛い　みよちゃんの御祝に
ゆうぜん　チリメン　一重ね
きちんと　結んだ　シツチンの
帶の模様の　うるわしき

◎螢　寄せ

○ホウー　ホウー　螢る来い
あっちの水は　にがいぞ
来っちの水は　甘いぞ
ホウー　ホウー　ホタル来い

◎ドンド焼

○起キロ起キロ
おんべん焼だに
起きろ
お飾り下げて
持って来い

◎雨　こんこ

○雨こんこ　やめよ
お寺の茶の木　宿れ
みのと　笠を
かせるぞ

◎子供唄

○ねんねん猫の尻に
ガニが　這いこんだ
やっとこさで　しよびき出したら
まだ　這いこんだ

◎子守唄

○みかん柑子　藪（ヤブ）の中で

子を産んで
畑のよそで　乳くれて
女子(オナゴ)なら　ひつぶせ
男なら　八幡太郎と
名を　附けろ

◎大川わらべ唄

○　まりつき

一(ヒ)ひや　二(フ)ーラ　お宮のお背戸で
丹波の　えの木で
一羽の雀が　お鷹にさらわれて
みの中より　申し上げりや
ぼんぼん　ちよよとついた

第6節　子どもの遊び道具と遊びの変遷

昭和34年、東伊豆町発足の頃の子どもたちの遊びをひろってみると、町村合併前とあまり変っていない。男女・年令によって多少の相違はあるが、友だち同志・遊び仲間と一緒に屋外で遊ぶことが多かったと言える。その頃の遊びの種類は多種多様であるが、子どもたちが好んで参加したと思われるものを記したみた。

イタド（稲取地区）・エス・リレー（家の周りや田畑の周り）・たがまわし・竹馬・カンポックリ・ベエゴマ・めんこ・木の実（紙）でっぽう（竹製）・ソフトボール・キャッチボール・三角ベース・ねっくり（大川地区・稲取地区ではねっき）・まりつき・ゴムとび・のりうま・お手玉（おじゃめ）・あやとり・おはじき等々

これらの遊びは、友だち（近所の異年令の集団）で行なわれるものが多く遊び用具も手作りのものが主流を占めていた。

昭和25年秋頃からプラスチックの製品ができるようになり、子どもたちの遊びの中に少しずつかかわりを持つようになってきた。昭和30年にプラモデルの名前で新らしいおもちゃが出回り始めたが、この町の子どもたちにはまだ遠い存在であったようだ。この年ミルクのみ人形が女の子の憧れであった。プラスチック玩具が次第に多くなり盛んに市販されるようになったことで、これまでのブリキ・木・竹製の玩具は姿を消しつつあった。

プラモデルの名前で出回った玩具の中心はミニカーと呼ばれる自動車の模型で種類も多くこれらを集めて、友だちと交換し合ったりして遊ぶ子が増えてきた。屋外の遊びの中にホッピングが出回ってきた。昭和33年にフラフープがブームとなり学校での体育に使われたこともあった。

子どもたちの遊びとおもちゃの流行にテレビ（昭和28年ＮＨＫ放映開始）も大きな影響があったと言える。（テレビドラマやマンガ）子どもの生活や遊びに深いかかわりを持つ人形にも流行があり、昭和35年にダッコチャン・42年怪獣ブームに乗ったミニ怪獣・47年パンダのランラン・カンカンが贈られて来たことによりパンダブームが起りぬいぐるみが流行した。

昭和48年にはオセロゲームが大ヒットし室内での遊びの主流を占めた。49年にはジグソーパズル・ビニル凧ゲイラカイトも子どもの生活の中に入ってきた。52年にはテレビゲームが出まわりこれで遊ぶ子の数が多くなった。55年になるとルービックキューブの大ブームが起きた。これは、手先の器用さだけでなく考える事が要求されるゲームと言える。ゲームウォッチも小型で子どもたちの間で大流行した。58年になるとファミリーコンピューターが登場しブームとなった。ファミコンと呼ばれるこのゲームに熱中する子どもたちが増えカセットも多様になってきている。又、アイドル歌手等が使ったりコマーシャルで扱われたために流行したもの（ローラースケート・スケボウ）も子どもの遊びとしては見逃せないと言える。

昭和30年代から子どもの遊びをたどってみると、テレビ・マスコミの影響が大きくなってきていることが特徴と言える。手作りのおもちゃより既製の市販されているおもちゃで遊ぶことが多くなってきている。遊びの場所も室内でのひとり遊びが目立ってきている。（複数の子どもたちが集まっているが、それぞれが異なる遊びをしている光景が見られる。）

伝承的な遊びをしている子どもたちもあるが、身体全体を使った遊び。集団での遊びが少なくなり、集団の中で個が育てられる場がせばめられているのではないだろうか。

第7節　東伊豆町の方言

当、東伊豆町は、半農半漁の町として栄えてきた。
当然、方言を区別していくと、漁業者のつかっていた言葉と農業者の使っていた言葉にわけてみるのも一方法ではないかと思われたが時間的なゆとりもなく、とりあえず、ら列するだけにいたった。
（方言　まだまだあると思います。お気づきの方言がありましたらつけ加えて下さい。）

〔あ〕

あかす	教える
あかっぱら	赤面（赤痢から）
あかりい	明るい
あかんぼう	赤ちゃん
あがりはな あがりぶち	あがりぐち
あくたれる	悪ふざけをする
あけい	赤い
あこ石	こぶし大の石
あさっぱら	早朝から
あせい	浅い
あそこけい	あすこですか

	（場所をあらわす）
あちい	熱い
あったけい	あたたかい
あっち	むこう側
あにい	目上の男の子
あのよう	あのね
あのなあ	あのね
あぶねえ	あぶない
あぶねえじゃよう	あぶないよう
あまさる	あばれる
あま	女の子
あまんじゃく	気のつよい女
あまら	女の子ら
あまちょ	女の子
あまったれ	あまえんぼう
あめい	甘い
ありんど	あり
あらかじめ	まえもって
あらかた	だいたい
あらっぺえ	むてっぽうで荒々しい
あるじゃ	あるでしょう
あわあくうな	あわてるな
あんまし	あまり
あんも	あんでまぶった餅
あんね	おねえさん（目上の女の人）
〔い〕	
いいじゃよう	よいでしょう
いいけ	よいですか
いいな	よいね
いうけえ	話しますか
いうちゅうと	言うと
いえい	相手を呼ぶ時のかけ声
いかせらっしえ	いかせてください
いかっしえよう	行きなさいよ
いきてい	行きたい
いかねえか	行きませんか
いくべえ	行きましょう
いぐすり	いびき
いけい	大きい
いけまあ	じょう談いうなの意
いこうじゃ	行きなさいよ
いさっぺえち	行きましょう
いじくる	気どりや
いじける	いたずらする
いじゃろ	ビックリする
いじょうる	ざる
いたど	いたずら（さわって）
いたびっこ	いたよ
いっぺい	板きれ
いっきだ	たくさん　いっぱい
いっきに	すぐだ
いってまった	すぐに　早く
いってこらっしえ	いってしまった
いてい	行ってらっしゃい
いねえど	痛い
いのく	いないよ
いれもん	動く
いらねえ	入れもの
いわっしゃんな	いらない
	言わないでよ
〔う〕	
うけだる	
うさりゃーがれ	はやくかえろ
うそっこ↔ほんこ	勝負をきめない
うそっぱち	うそつき
うぬらあ	おまえら
うち	家
うめい	うまい　じょうずだ
うだらっけい	あくどい
	大きいことをいうな
うらっぽ	先端
うるせい	うるさい
うんま	馬
うんこ	大便
うんと	たくさん
うんまける	ほかの入れ物に移しかえる
うんめい	うまい（おいしい）
〔え〕	
ええけよ	いっしょに行ってよ
ええかげん	いいかげん
ええだ	あいだ（間）
ええて	相手
ええかん	ずいぶん
	間をあらわす
ええらうち	あなたの家
ええすらう	相手にしないで適当に
えてもの	相手をみさげる時
えへらえへらして	ぐうたら者
えます	物をにたてさます
えれい	多い　立派
えんよしょ	ごたごたする
ええ　けつめど	わからずや
ええ　はなくそ	相手にならない者
〔お〕	
おかず	副食物
おかた	花嫁
おかたぐろ	人形（花嫁）
おきにいく	出漁する
おくらぶち	いろりばた
おきゃがれ	起きなさい
おこわ	赤飯
おじい	おじいさん
おしい	おみおつけ
おしょうくり	生運搬
おじゃめ	お手玉
おせいじゃ	遅いよ
おせえろ	教えなさい
おたふく	女の人を叱る時
おっかあ	おかあさん
おっかしい	おもしろい
おっかねえ	こわい
おっぱらう	おいはらう
おっこぼれる	あふれ出る
おてんたら	おしゃれ（いろいろなことを

	する）
おてんとうさま	太陽・お日さま
とと	魚
おとったん	おとうさん
おとおり	鳥居
おばあ	おばあさん
おべえてらっしえ	覚えていなさい
おべえる	おぼえる
おぺろ	うどん
おべっか者	ていさいかく言う者
おまんま	ごはん
おめい（おめいさま）	あなた（あなたさま）
おもしれい	おもしろい
おもてい	おもたい
おやこ	親せき
おらあ	ぼくら　わたしら
おんべかつぎ	えんぎかつぎ

〔か〕

かあちゃん	おかあさん
カー	鬼
かえいそう	かわいそう
かきゃいいら	書けばよいでしょう
かくねる	かくれる
かさぶた	きずぐちのなおりかけた皮
かしこまる	正座する
かしき	ごはんたき
かしっけい	ずるい
かじかむ	こごえる
かたあもん	やくたたず者
かたちんば	ビッコ・バランスがとれないなど
かちあわせる	けんかさせる ぶつかりあわせる
かっかあ	おかあさん（すてぜりふを言う時）
かつぎ	海女
かっちゃくる	夢中になって仕事する
かっぱれい	ぬすむ
かってぼし	カッカッしている時の捨セリフ
かっぽる	投げる
かっぽれ	ほうれ（なげろ）
かていもん	不具者 手におえない時の捨セリフ
がに	かに
かまう	いじめる
からす	忘れものをよくする人
かれいなあ	からいなあ
かんじょうしろ	計算しろ
かんしろまあ	かにして下さい
かんだりいなあ	かったるいなあ
がんだめし	しんのあるごはん
かんげえがねえ	考えがない（浅い）
かんくろうがわりい	計画がわるい
がんばらっしえよ	がんばりなさいよ

〔き〕

きちげえ	頭が正常でない
きけえねえ	聞こえない
きけえるけ	聞こえますか
きたねえ	きたない
きちゃだめ	来てはだめ
ぎっちょっぱ	左きき
きべいよう	着ることにしよう
きょうでい	兄弟
きょうつけろ	気をつけろ
きりがねえ	さい限がない
きれよう	着なさいよ
きんつば	今川焼
きんのう	昨日
ぎんでい	金目鯛

〔く〕

くいてい	食べたい
くう（魚）	つれる
くえ	たべろ
ぐえいがわるい	ぐわいがわるい
くじいたな	折ったな
くじけた	おれた
ぐじゅぐってい	くすぐったい
くっつける	いっしょにさせる（あわせる）
くそ	大便
くそうくれ	どうでもしろ
くそったれ	相手にならない者
くそっぱら	大便のため腹が痛い
ぐちゃ	水たまり
くちゃくちゃ	
くず	動作緩慢
ぐずる	すねる
くらう	たべる
くらっしえ	ください（店に買物にいく時）
くんのう	ください（友だちに物をもらう時）
くんだ（山が）	くずれた（山が）

〔け〕

けいまわる	機敏に動く
けいろうじゃ	かえろうじゃ
けえがら	貝がら
けえるぞ	帰るぞ
けえた（なわとび）	だめになった
けえたか（絵）	かいたか（絵）
けつかれ	いきなさい
げどうされ	ばかもの
けぶってい	けむたい
げんつう	げんこつ
げんなり	つかれた
げんのう	かなづち

〔こ〕

ごうがやける	はらがたつ
こうこ	つけもの（たくわん）
ごうじょっぱり	いじをはる者
こうもり	ねがいりをうつ者
こえい	こわい（ごはんがかたい）

こわけえし	若衆の中での一番年少者	さあられた	さわられた
		さあらば	いつでも、いつでも
ござらっしえ	来て下さい	さが	坂
こじゃ	三時のお茶（中食）	さきっぽ	先端
こずかれる	たたかれた（打たれる）（ぶたれる）	さくべる	木など燃えるようにする
		さしい	ひさしぶり
こせえる	こしらえる	さでいぼっこ	さざえ
こっちゃあ	こちらは	さっさと歩け	早く歩け（急いで）
こていました	身にしみました（困った）	さっぽかす	なげ出す
			約束をはたさない
こどうら	男の子　小僧	さばく	やぶく
こば	すみ	さびい	さむい
こびつけ	こげつく	ざらに	いくらでも
こばやく	早く	されこむ	入れる
こべえじゃよう	来るだろう	されこんでおけ	入れておけ
こねえか	きなさい		
こまっけい	こまかい	〔し〕	
こやし	肥料	しかたねえな	しかだがないな
こればっけか	これぽっちか	しこうがいい	かっこうがよい
ころける	ころぶ	しけ	台風
こわっぱしい	かたい こわっぱしい ↕ みりっけい	しける	のせる（物をたな等に）
		じちなし	仕事などしっかりできない（じょうず）
こんじゅう	この間	しちめんどくせい	めんどうだ
こんちくしょう	このやろう	しっかりとる	たくさんとる
		しっつかむ	とらえる
〔さ〕			つかまえる
さあたら歩く	いろいろなところへ行き、遊ぶ	しっぱたく	破く
		しばる	ゆわく

しっぱたく	たたく　うつ	ずうずうしい	あつかましい
しってねえ	知らない	すけい	ずるい
しってるもんか	知らないぞ	ずし	天井うら
しなっけい	やわらかい	すっとぶ	走る
しびい	渋い	すっぺい	すっぱい
しべえじゃよう	やりましょう	すっぽかす	約束をはたさない
じべた	地面	すっぽぬける	ずらかる
しねえか（メンコ）	しないか（メンコ）	ずつなし者	なまけ者
しまおうじゃ	終わりにしょうよ	ずねえ	仕事をしないでいたりする人　ずるい人
しまってこう	大切に保管しておこう		
		すばしっけい	人をごまかす
しゃあしゃあしている　平気でいる		すんな	するな
しゃく	ひしゃく	するべえ	やろう
しゃがむ	かがむ		
しゃあねえ	しらない	〔せ〕	
しょでいいもねえ	やることがない	せいせいした	気持ちよくなった
しょていらく	どうさをかける	せいづち	さえづち
しょっこ	頭にできるおでき 人をばかにする時つける	せっかち	仕事など早めにする人 あわて者
しょっぱち	言葉。ええしょっこ	せっこうもの	働きもの
しょんじょらしくしろ	身なりをととのえてやれ	せっちん	便所
		せつねえ	苦しい
しろこ	しるこ	せんごく	ごきぶり
じんじい	おじいさん（あくたれことば）		
しんびれ	しびれ（長く座っていて）	〔そ〕	
		そうけ	そうですか
じんみ	じみ	そうさよう	そのようだよ
		そうしろうじゃ	そのようにしょうよ
		そうずら	そうでしょう
〔す〕		そうするちゅうと	そのようにすると

そうするべえ　そのようにしょう
そうだらじゃよう　そのようでしょう
そのでい　その調子
そりゃ　それは

〔た〕
たあんま　ちょっとまて
タイム
たあーすけた　遊びの中で救うとき
だしき　座敷
たたくじく　なぐりたおす
たたっしえ　たちなさい
たちがわりい　性質がわるい
たちまわりがわりい　手順がわるい
だつ　雑
たばこぼん　はいざら
たばけもん　知っていて知らない
ふりをする者
たべらっしえ　食べてください
たま　たも網
だめだじゃ　いけないよ
だめんなりゃいい　だめになるとよい
たらたらもち　うどん粉を水でとき
油で焼く
ホットケーキ
たんと　たくさん
だんな　父親
だんみやく　ちらかっている
（よごれて）かたず
けてない
だんめ　ごっこ

〔ち〕
ち　牛乳
ちっけい　小さい
ちょっとくれい　すこしください
ちゃっぱぐみ　仕事が充分できない
なかま
ちゃらんぷらん　いいかげん
ちゃんとしろ　しっかりしろ
ちょいちょい　ときどき
ジャンケンの時のか
け声チョイチョイ
ちょい
ちょうどいい　ちょうどよい
ちょくちょく　度々
ちょっと　すこし（間をおくと
き）
ちょうづば　便所
ちょれい　じちなし
いくじなし

〔つ〕
つきんぼう　鮪をとるときの漁法
ついし　金目鯛つりのこと
つえい　強い
つっけいぼう　つかえ棒
つっつく　つつくこと
つっとびっこ　競争
つっからかす　押す
つんのめらかす　押し倒すようにする
つぼら　石と石とくみあわ

さってできているす
き間をいう
つむ　ねじる
つんのめる　前にころぶ
つれいな　つらいな

〔て〕
ていこ　たいこ
でいこん　大根
ていしたことねえ　たいしたことはない
ていたらく　たいど（身のまわり）
ていへんだ　たいへんだ
でいじょうぶ　だいじょうぶ
でいち　だいいち
でいぶ　だいぶ
でいてい　だいたい
でいきれい　だいきらい
↕反対語
でいすき　だいすき
ていら　たいら
できねえ　できない
でくちがいい　話のしかたが上手
でけい　大きい
でけいこというな　大げさにいうな
てしお　小皿
でつがまわらなねえ　れつがまわらない
てっか　めんこを手でこすっ
てとる　また名人
てっぱつ　大きい
でっけい
でば　ほうちょう
でぶ　おでこ
てめえらあ　おまえら
でれすけ　ばか者
でね　おかね
てんません　小舟
てんぽせん　まぬけ者
でんきんばしら　電柱
でんぐりかえす　ひっくりかえす

〔と〕
どうきん　雑布
とうさんめ　とうせんぼ
どうしんぼう　いくとく物資
どうしょうもねえ　どうしてよいかわか
らない
どしゃがらかす　たたいてほうりだす
とっちゃん　おとうさん
とばむ　しゃがむ
ととうをくむ　なかまが一団となる
どやしつける　かみなりをおとす
どらんかん　ごじき　ドラム罐
とりっこ　取りあい
とんがっている　とがっている
どんでい　そまつにする
（しまつがわるい）
とんちんかん　見当ちがい
とんま　まぬけ

〔な〕
なあ　ねえ
なあさよう　そうだよね

なあせろよ	仲間に入れてよ
なぐらかせ	力いっぱいやれ
なげえ	長い
なぶら	大群

〔に〕

にいしい	新しい
にくったらしい	にくらしい
にげえ	にほい
にしゃ	おまえは
にわ	土間

〔ぬ〕

ぬくてい↔ひゃっけい	あたたかい
ぬしゃあ	おまえは
ぬりいなあ	あつくもなく冷たくもない
	ちょっと冷たい

〔ね〕

ねえから	ないから
ねえぞ	ないぞ
ねっこむ	相手の家にいって談判する
ねどこ	ねる場所
ねぶってい	ねむい
ねれねえ	ねむれない
ねらっしえ	ねなさい
ねんねだよ	こどもの意
	きむすめ
	けがれない

〔の〕

のうのさま	仏様
のさばる	いばりちらす
	ずにのる
のしける（たなに）	のせる（たなに）
のっかる	乗る
のぼったな	ふんづけたな（足などを）
のまっしえ	飲みなさい
のめくる	前へたおれる

〔は〕

はかっしえ	はきなさい(座敷を)
ばかえい・ばかづら	ばかっちょ　ばかすけ　ばかやろう
はじっこ	すみ
はしゃぐ	乾燥する
	はなしすぎる
はちじゅう	頭が少したりない者
	わからずや
はっけい	冷たい
はなしにならねえ	相手にならない
はなっから	最初から
はみ	魚群
はやくしらっしえ	早くしなさい
はやくぶちかれ	はやくねなさい
はらくちい	はらいっぱい
はらんべい	うつぶせ
はらへった	おなかがすいた
はりたおす	なぐりたおす

ばんげ	夜
はんてい	反対
ばんな	わな
ばんばあ	おばあさん
はんばいじょ	市場（魚）
はんぺら	はんぶん
はみばっけい	魚の群だけ

〔ひ〕

ひがたぼっこ	日なたにあたる
びき・びきどん	蛙
ひける（学校）	おわる（学校）
ひじきり	ぶしょう者
びしょっかき	泣きむし
びちびち	やわらかい
ひっかじる	かじる
びっくりした	おどろいた
びっちゃく（こ）	バランスがとれていない様　まがっている
ひっちょぶく	引く
ひっぱたく	たたく
ひでい	ひどい
ひとっぱ	ひとつ　ひときれ
ひゃっけい	冷たい
ひょうきん者	おもしろい人
ひらびってい	たいら
びりつける	たたきつける
ひれいな	広いな
ひんまがる	曲がっている

〔ふ〕

ふうふうそだてる	かわいがってそだてる（目に入れても痛くないほど）
ふけい	ふかい
ぶちょった	おっこった
ぶつかる	ぶちあたる
ぶっくだく	くだいてしまう
ぶっくらす	なぐりつける
ぶつける	あてる
ぶっさらう	打ち倒す
ぶったたく	たたく
ぶったてる	戸をしめる
	家を建てる
ぶっぱがせ	はぎとってしまう
ふてい	太い
ぶと	天草
ふるしい（ふりい）	古い
ふるしゃ	チンブリをかく
ふんだから	それだから
ふんだくる	うばいとる
ふんだな（おまえ）	ふみつけたな（おまえ）
ふんとう	ほんとう
ぶんなぐる	たたく
ぶんなげる	投げとばす
ふんまわす	ふりまわす
ふんた	あなた

〔へ〕

べー	いやだの意
へえいくの	もういくの
べえしょ	賠償
へえった	入った
へえらっしえ	はいりなさい
へえるべえ	はいろうじゃ
へえろうよ	はいろうよ
へえくしらっしえ	早くして下さい
へー	灰
へえざら	灰皿
へえっくこい	早くこい
へえねえ	もうない
へご	ひご
へっこむ	ひっこむ
へっぺせえる	押えつける
へっぷり	おならをする
べべ	着物
へでもねえこというな	小さいことまで言うな
へらへらもち	小麦粉で油をひいてつくったもち、中にあんを入れる

〔ほ〕

ぼう	背おう
ぼうされ	おぶさりなさい
ほうりだす	なげだす
ぼけなす	ばかよばわりする時のことば
ほじくる	掘る
ぼたもち	おはぎ
ほだくな	大きなことを言うな
ぼっこ	ボロをつくろってある衣服
	人をけなすときにつかう
ぼっこしょうり	わらぞうり
ほっつきまわる	あてもなく歩きまわる
ほっぺた	ほほ
ほらあな	大きくあけてある穴
ほんこう　そっこ	真剣勝負
ぼんぼ	おぶさる

〔ま〕

まあり	まり・ボール
まじいな	おいしくない　うまくいかない
まっとくれ	もっとくれ
まっててくらっしえ	待ってて下さい
まわれよ（家に）	かえれよ（家に）
まんでっこ	さざえのふた
	お金の別名

〔み〕

みあげ	みやげ
みしろ	むしろ
みじけい	短い
みずれい	はずかしい
みてくんの	みて下さい
みていだ	ようだ
みべえ	みよう
みようていな	きれいだな
みらっしえ	みなさい
みりっけい	しなやか（やわらかい）　かわいい

〔む〕

むかしゃなあさ	昔はねえ
むけいがわ	むかい側
むけいにこい	むかいにこい
むさんこう	無理を承知でやること
むげい	責任をもってやってくれない　ずつなし
むしる（草など）	手でとり去ること

〔め〕

めえねえ	みえない
めし	飯
めっぱあ	まぶたがそりかえったようになっている
めっかち	目がみえない
	目あきでもよく物をみようとしない
めっける	みつける
めんどうくせい	めんどうなことだ
めめず	みみず

〔も〕

もうじき	もう少し
もしき	たきぎ
もってえねえ	もったいない
持っててくんの	持ってて下さい
もつけ	つけぎ
もっと	もう少し

〔や〕

やあさに	たくさん
やくていもねえ	わざわざやることはない
やしい	安い
やっけい	やわらかい
やっこさん	相手をみさげていうとき
やっとこさ	かろうじて
やっぱし	やはり
やすむべえ	休みましょう
やだ	いやだ
やぶさわら	木・竹の密集しているところ
やぶせってい	うっとうしい
やるべえじゃよう	やりましょう
やらけい	やわらかい
やんめどうつう	流行性結膜炎

〔ゆ〕

ゆりぶち	いろりばた

〔よ〕

よういじゃねえ	たいへんだよ
ようえ	弱い
ようめし	夕飯
よさっしえ	よしなさい

よこさっしえ　よこしなさい
よこだっぽう　横はら
よしゃがれ　よせよ
よすべえ　よすよ
よせまあ　よしてよ
よっぱれい　酒によっている人
よばある　呼ぶ
よばれる　ごちそうになる
よべよう　さそってくれよ
　　ごちそうしてよ

〔わ〕
わかんねえ　わからない
わけいし　若衆
わけちゃわかんねえ　さっぱりわからない
わしゃ　わたしは
わっぱ　輪
わりい　悪い
わりゃ　君は　あなたは
わるし　悪玉

〔ら〕
らっぱこたい　らっぱ隊

〔り〕
りこうもん　利こうな人

〔れ〕
れいねん　来年

〔ろ〕
ろくでもねえ　正常でない
　　えんぎがわるい

第8節　古文書

1．戸長役場文書

(1)　年貢

番号	年（西暦）月日	表　　題	差出人	名宛	形態	数量
1	延宝3(1675)11,15	夘之年稲取村御年貢可納割付之事	伊兵右㊞	名主百姓中	状	1
2	明和元(1764)10	申御年貢可納割付之事	江太郎左衛門㊞	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
3	明和5(1768)11	子御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
4	明和6(1769)11	丑御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
5	明和7(1770)11	寅御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
6	安永3(1774)10	午御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
7	安永9(1780)10	子御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
8	天明2(1782)	寅御年貢可納割付之事（後欠）			〃	〃
9	寛政7(1795)2	寅御年貢米金皆済目録			〃	〃
10	寛政8(1796)10	辰御年貢可納割付之事	〃	〃	〃	〃
11	寛政12(1800)2	未御年貢米金皆済目録	〃	〃	〃	〃
12	寛政13(1801)2	申御年貢米金皆済目録	〃	〃	〃	〃
13	享和3(1803)2	戌御年貢米金皆済目録	小野川順蔵外3名連印	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
14	享和4(1804)2	亥御年貢米金皆済目録	小野川順蔵外3名連印	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
15	文化2(1805)2	子　〃	〃	〃	〃	〃
16	〃 5(1808)	夘　〃	虫喰いのため不明		〃	〃
17	〃 6(1809)2	辰　〃	小野川順蔵外4名連印	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
18	〃 8(1811)10	未御年貢可納割付之事	吉田内十郎外3名連印	〃	〃	〃
19	〃 9(1812)2	未御年貢米金皆済目録	〃	〃	〃	〃
20	〃 12(1815)2	戌御年貢米金皆済目録	吉田甚五兵衛外3名連印		〃	〃
21	〃 14(1817)2	子御年貢米金皆済目録	〃	〃	〃	〃
22	文政2(1819)2	寅　〃	〃	〃	〃	〃
23	〃 7(1824)2	未　〃	湯山藤田郎外4名連印	〃	〃	〃
24	天保2(1831)10	夘御年貢可納割付之事	田中才次郎外5名連印	〃	〃	〃

25	天保 3 (1832) 2	夘御年貢米金皆済目録	田中才次郎他 6 名連印	名主・組頭・惣百姓	状	1
26	〃 13(1842)正月	丑御物成皆済目録	森下楯之助外 6 名連印	〃 百姓代	〃	〃
27	〃 (〃)10	寅御年貢可納割付之事	〃 5 名連印	〃 惣百姓	〃	〃
28	弘化 2 (1845)10	巳 〃	原川直左衛門外 7 名連印	〃	〃	〃
29	嘉永 2 (1849)正	申御物成皆済目録	〃 8 名連印	〃 百姓代	〃	〃
30	嘉永 2 (1849)10	酉御年貢可納割付之事	原川直左衛門外 7 名連印	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
31	〃 3 (1850)正	酉御物成皆済目録	〃	〃	〃	〃
32	〃 6 (1853)10	丑御年貢可納割付之事	小原直之進外 8 名連印	〃	〃	〃
33	〃 7 (1854)10	寅 〃	〃	〃	〃	〃
34	安政 2 (1855)正	寅御物成皆済目録	〃	百姓代	〃	〃
35	〃 2 (〃)10	夘御年貢可納割付之事	原川直左衛門外 8 名連印	〃 惣百姓	〃	〃
36	〃 3 (1856)10	辰 〃	〃	〃	〃	〃
37	〃 4 (1857)10	巳 〃	田所八五郎外 7 名連印	〃	〃	〃
38	〃 5 (1858)正	巳御物成皆済目録	〃	〃 百姓代	〃	〃
39	〃 6 (1859)正	午 〃	〃	〃	〃	〃
40	〃 6 (〃)10	未御年貢可納割付之事	〃 8 名連印	惣百姓	〃	〃
41	万延元(1860)10	申 〃	〃	〃	〃	〃
42	〃 2 (1861)正	申御物成皆済目録	〃	〃 百姓代	〃	〃
43	文久 2 (1862)正	酉 〃	〃	〃	〃	〃
44	〃 4 (1864)正	亥 〃	小野官市外 6 名連印	〃	〃	〃
45	元治 2 (1865)正	子 〃	中村源八外 8 名連印	〃	〃	〃
46	慶応元(1865)10	丑御年貢可納割付之事	中村源八外 8 名連印	名主・組頭・惣百姓	〃	〃
47	〃 2 (1866)正	丑御物成皆済目録	〃	〃 百姓代	〃	〃
48	〃 3 (1867)正	卯 〃	中村鋭次郎外 6 名連印	〃	〃	〃
49	〃 3 (〃)10	寅御年貢可納割付之事	中村源八外 8 名連印	〃 惣百姓	〃	〃
50	〃 3 (〃)10	卯 〃	中村鋭次郎外 6 名連印	〃	〃	〃
51	明治元(1868)10	辰 〃	小野恒三郎外 1 名連印	〃	〃	〃
52	明治 2 (1869)正	辰御物成皆済目録	〃	〃 百姓代	〃	〃
53	〃 2 (〃)10	巳御年貢可納割付之事	瀬川広治外 1 名連印	〃 惣百姓	〃	〃

54	明治 3 (1870)正	巳御物成皆済目録	瀬川少属外 1 名連印	〃 百姓代	状	1
55	〃 3 (〃)10	午租税可納割付之事	〃	〃 惣百姓	〃	〃
56	〃 4 (1871)正	午租税皆済目録	権少属高安益謙外 2 名連印	〃	〃	〃
57	〃 4 (〃)10	当辛未租税可納割付	権少属高安益謙外 2 名連印	〃	〃	〃
58	〃 5 (1872)10	壬申租税可納割付之事	足柄県庁㊞	戸長・副戸長・百姓代	〃	〃
59	未 詳	未御年貢皆済目録	虫喰いのため不明	〃	〃	〃

(2) 金融

番号	年（西暦）月日	表 題	差出人	名宛	形態	数量
1	天保 2 (1831)夘 2 月	借用金質地証文之事	稲取村 名主 八右衛門外 7 名	沼津宿 勝又重三郎	状	1
2	〃 8 (1837)酉 6 月	奉拝借御金証文之事	豆州賀茂郡稲取村 名主 喜兵衛外 4 名	沼津北 御役所	〃	〃
3	安政 5 (1858)午12月	差上申御金証文の事	組頭 重次郎㊞	沼津方 御役所	〃	〃
4	文久 2 (1862)戌10月	覚	江川太郎左衛門手代	稲取村	〃	〃
5	慶応 2 (1866)寅11月14日	〃	江川太郎左衛門手代 柏木●蔵	稲取村	〃	〃
6	〃 3 (1867)夘 3 月	沼津拝借籾拝借受書	拝借人惣代 西町治兵外 3 名	御名主 安右 殿	〃	〃
7	〃 3 (1867)夘 3 月	御恐り人書附奉願上へ	稲取村役人惣代 組頭 文右衛門	沼津郡 御役所	〃	〃
8	〃 3 (1867)11月13日	覚	江川太郎左衛門手代 柏木●蔵	稲取村	〃	〃
9	明治元(1868)辰12月18日	〃	〃	稲取村	〃	〃
10	〃 子11月	〃	望月周助	稲取村 善四郎	〃	〃
11	〃	〃	原川直左衛門	稲取村 重次郎外 1 人	〃	〃
12	〃 丑11月	〃	森下猪之助外	稲取村	〃	〃
13	〃 亥10月	〃	〃			

(3) 難波船

番号	年（西暦）月日	表 題	差出人	名宛	形態	数量
1	延宝 8 (1680)極月5日	證文之支（写）	白田村名主 権兵衛外 5 名	稲取村名主 斉藤徳右衛門外 5 名	状	1
2	文政 8 (1825)10月20日	乍恐以書付御願奉申上候	大阪紺屋町大準屋伝兵衛船水主惣代外 3 名	片岡周次郎	〃	〃
3	〃 9 (1826) 2 月	当村庄兵衛押送船難船一件済書上覚	稲取村船主 庄兵衛外 7 名	沼津御役所	〃	〃
4	天保 7 (1836)11月	取扱内済為取替之支	片瀬村名主 久次郎外	稲取村名主庄七外 8 名	〃	〃
5	安政 5 (1858)12月	乍恐以書付奉申上候（案文）	3 名		〃	〃

6	安政5(1858)12月	差上置申一札之事	摂州大阪長坂佐兵の船 沖船頭願人栄三郎外 稲取村八右衛門殿 役人中	状	1
7	万延元(1866)5月14日	入置申一札之事	下田町船主源助 慶助㊞外6名 稲取村名主 八右衛門役人中	〃	〃
8	正月22日	乍恐以書附奉願上候	船主弥兵衛親類中 御村役人家中様	〃	〃
9		(届書) 前文	大嶋波浮港 船頭新兵衛㊞ 村方御役人中様	〃	〃
10		差上申買船証文之事(案文)	足柄県管下 稲取村桑原常右衛門 船宿改御役所	〃	〃
11	正月	御吟味ニ付申上候書附	稲取村名主小八外8名 江川太郎左衛門様御支配沖役人片岡伴六郎	〃	〃

(4) 訴訟

ア. 海 論

番号	年(西暦)月日	表 題	差出人 名宛	形態	数量
1	文政元(1818)10月29日	乍恐以書付奉願上候	水野出羽守領分稲取村天摩船持福次郎外123名 村役人10名連印 市川丈助 服部平十郎	状	1
2	弘化2(1845)9月	差上申済証文之事	訴証人稲取村役人惣代外1名連印相手 白田村百姓代 政吉 寺社御奉行所	〃	〃

イ. 山 論

番号	年(西暦)月日	表 題	差出人 名宛	形態	数量
1	文化4(1807)12月	差上申一札之事	水野出羽之守領分 平八 元八 江川太郎左衛門代管所 英次郎	状	1
2	〃 11(1814)11月8日	御請書写	梨本村名主他1 稲取村他4ヶ村	〃	〃
3	天保13(1842)3月	覚	見高村御名主喜左衛門役人稲取村名主定次郎4名連印	〃	〃
4	嘉永4(1851)3月	一札の事	稲取村名主喜兵衛外2名連印 見高村役人中	〃	〃
5	安政4(1857)3月	覚	稲取村百姓代善四郎外2名 見高村喜左衛門殿 役人中	〃	〃
6	元治元(1864)3月	〃	稲取村百姓代甚蔵2名 見高村御名主源左衛門殿	〃	〃
7	明和6(1769)6月	差上申一札之事	下佐ヶ野村 名主 筏場村 名主 御評定所	札	〃
8	安永4(1775)4月	乍恐以書付を奉願上候御事	稲取村外2ヶ村 御奉行所	状	〃
9	明治6(1873)3月	覚	見高村入谷 戸長他2名 稲取村 戸町	状	1
10	明治12(1879)6月	為取替証	筏場村外3ヶ村	札 状	4 1
11	明治	豆州天城山伐採雑木払い下げ代価明細	静岡県梨本村、大鍋村、筏場村	札	1
12	辰4月	御裁許書 与	稲取村小八外3名 大川村奈良本村2名 御評定所	〃	〃

(5) 村政

番号	年(西暦)月日	表 題	差出人 名宛	形態	数量
1	享和2(1802)4月	差上申一札之事	豆州稲取村百姓三郎左衛門外11名 御役所	状	1
2	天保5(1834)5月	差上申一札之事	五人組惣代 栄次郎外総連印	〃	〃

(6) 白田硫黄山

番号	年(西暦)月日	表 題	差出人 名宛	形態	数量
1	宝暦7(1758)4月	稲取村、片瀬村 申口	稲取村名主、片瀬村名主 三嶋御役所	状	1
2	天保7(1836)5月	御願申一札之事	稲取村 浜村、谷津、見高御名主	〃	〃
3	安政5(1858)11月	豆州白田村硫黄開山之儀ニ付願書	白田村長百姓 江川太郎左衛門様	冊	〃
4	安政5(1858)12月	乍恐以書付奉申上候	八幡野村外七ヶ村惣代 韮山御役所	状	1
5	〃 6(1859)6月	〃	惣代 浜村、稲取村 〃	〃	〃
6	〃	乍恐以書付歎願奉申上候	奈良本村外2ヵ村 名主 〃	〃	〃
7	文化元(1861)6月	差出申書付之事	白浜村外8ヵ村 役人連印 稲取村御役人	〃	〃
8	〃	豆●白田村硫黄故障願書	稲取村々役人 沼津御役所	冊	〃
9	元治元(1864)5月	給々拾弐ヶ村議定連印之支	白浜村外11ヶ村役人11名連印	状	〃
10	慶応元(1865)	池代村入硫黄堀出しニ付日記竝差障之廉扣張		冊	〃
11	〃 3(1867)11月	硫黄一件拾弐ヶ村規定書之支	白浜村外11ヶ村村役人	状	〃
12	〃	総々拾弐ヶ村議定連印之事	白浜村外11ヶ村村役人	〃	〃
13	慶応4(1868)	乍恐以書付奉申上候	白浜村外11ヶ村 名主 小田原御監 御裁番所	〃	〃
14	明治2(1869)4月	御糺ニ付乍恐以書付奉申上候	稲取村小前惣代百姓代組頭御出役 小野恒三郎	〃	〃
15	〃	御糺ニ付乍恐以書付奉申上候	〃	〃	〃
16	〃 6	達 章	服部能人 豆州稲取村	冊	〃
17	〃	乍恐以書附奉申上候	稲取村百姓代組頭、小前惣代 小野恒三郎	状	〃
18	〃	乍恐以書付奉歎願候	稲取村、片瀬村 民商官聴詔詞会計官	冊	〃
19	〃	目安箱製札之写		状	〃
20	明治2(1869)6月	御糺ニ付申上候書付	稲取村惣代，百姓 浜町御屋敷知計局	冊	1
21	〃	(硫黄一件ニ付達)		〃	2
22	〃	乍恐以書付奉申上候	水野出羽守領分賀茂郡大川村	状	1
23	年未祥	願書一札之事	赤沢村外5ヶ村役人 片瀬、稲取6ヶ村惣代	〃	〃
24	明治11(1878)6月	豆州白田入宮地硫黄礬試堀願人5示談仕 趣上申	白田村惣代 外 県令 大迫貞清	冊	〃
25	〃 13(1880)3月	硫黄一件願書	鈴木又七外3名 郡長 依田佐二平	〃	〃
26	〃 5月	借区開坑願	丸山宣方外5名 県令 大迫貞清	〃	〃
27	〃 3月	(願 書)	鈴木又七外3名 郡長 依田佐二平	〃	〃

28	明治13(1880) 5月	借区開坑願	東京丸山宣方　県令　大迫貞清	冊	1
29	明治17(1884) 2月	借区開坑願	石井謙次郎　県令　奈良原繁	状	〃
30	〃　3月	硫黄開坑故障之儀ニ付理由上申書	奈良本村外2ヶ村惣代　郡長　大野恒哉	冊	〃
31	〃　〃	硫黄一件書類		〃	〃
32	〃　5月	硫黄礦開坑故障一件意欠書		〃	〃
33	〃　〃	証	高橋一勝、山田八蔵	状	〃
34	〃　〃	伊豆国賀茂郡白田村産ノ硫黄礦ノ試験	分析係長　ヲ、コルセルト	〃	〃
35	〃　〃	請願書	稲取村平民農	冊	〃
36	明治17(1884) 5月	借区開坑願	願人　石井謙次郎　県令　関口隆吉	冊	1
37	〃 18(1885) 3月	白田入天城山官森内硫黄鉱之儀ニ付　御届書	白田村人民惣代稲取村外4ヶ村　戸長太田貞幹	状	〃
38	〃　〃	天城山硫黄礦借区願之儀ニ付同盟人加名願	磯辺永哉他2名　県令　関口隆吉	冊	〃
39	〃 18(1885) 4月	上　申　書	稲取村外4ヶ村戸長　太田貞幹県令　関口隆吉	〃	〃
40	〃　〃	上　申　書	願人　山田八蔵　戸長　太田貞幹	〃	〃
41	〃　〃	上申書	戸長　太田貞幹　県令　関口隆吉	状	〃
42	〃　6月	（　達　）	工部卿　伯　佐々木高行	〃	〃
43	〃	豆●賀茂郡白田入天城山官林内硫黄借区開坑願書御交換願	同盟人　石井謙次郎外　県令　関口隆吉	冊	〃
44	〃 19(1886) 4月	（　達　）	農商務次官　吉田清成　県令　関口隆吉	状	〃
45	〃　〃	（　達　）	〃	〃	〃
46	〃　〃	願　書	稲取村791戸惣代外，奈良本村　県令　郡長	冊	〃
47	〃　5月	達	郡勧業課　稲取村外4ヶ村　稲取人民惣代中	〃	〃
48	〃　〃	硫黄鉱試験、告示書	衛生局東京試験所　田原良純外1名	状	〃
49	〃　〃	原品硫黄御試験願ニ対シ現場ノ形況申上候	稲取村　桑原新太郎　衛生局　東京試験所	冊	〃
50	〃　7月	礦石分析表	拡業社	状	3

(7) 記録

番号	年（西暦）月日	表　題	差出人　名宛	形態	数量
1	年月日　未詳	（稲取旧記）		状	2

(8) 交通

番号	年（西暦）月日	表　題	差出人　名宛	形態	数量
1	慶応3(1867) 8月	箱根宿助郷御印書写竝宿方廻状写	稲取村名主　安左衛門	冊	1

(9) 雑

番号	年（西暦）月日	表　題	差出人　名宛	形態	数量
1	明治4(1871) 6月19日	差上申一札之事	民五郎宿親類その他　御役人	状	1

※現在、白田地区・片瀬地区の古文書については整理作業中である。